

富山県小矢部市

石名田木舟遺跡発掘調査報告書

－ほ場整備（経営体育成基盤整備事業）地崎地区に伴う埋蔵文化財調査(2)－

2011年3月

小矢部市教育委員会

序

小矢部市は、三方が山に囲まれ、市域中央を小矢部川が北流する自然豊かな土地です。小矢部市はこの恵み豊かな土地の利点を活かし、古の奈良時代から現代まで、陸路や水運などに恵まれた交通の要衝として発展してきた町です。

本書は、ほ場整備（経営体育成基盤整備事業）地崎地区に伴い、平成22年度に実施した、石名田木舟遺跡の発掘調査成果について報告するものです。この地区の調査は、昨年度も限られた面積の中ではありましたが古代から中世の遺構を発見し、当時の人々の生活の一端が明らかとなりました。

今年度の調査では中世の井戸をはじめとする内容の豊かな遺物を伴って多数の遺構を発見することができました。なかでも、溝は武家屋敷を巡る区画溝の可能性が高く、発見された遺物の持ち主を連想させてくれます。

この発掘成果が今後の研究の参考となり、埋蔵文化財に対する理解と保護の一助となれば幸いです。

終わりに、発掘調査から報告書刊行に至るまで格別のご指導とご協力をいただきました富山県高岡農林振興センターをはじめ、地崎地区の皆様や関係各位の方々に心から感謝申し上げます。

平成23年3月

小矢部市教育委員会
教育長 日光 久悦

例　　言

1. 本書は、富山県小矢部市地崎地区に所在する石名田木舟遺跡で実施した発掘調査について報告するものである。
2. 調査は、富山県高岡農林振興センターより委託を受け、小矢部市教育委員会の指導のもと、㈱イピソクが実施した。
3. 調査年度、発掘面積、調査期間は次のとおりである。

2010（平成22）年度　全面調査 1,250 m²、現地調査は平成22年7月28日～平成22年9月30日
H、整理作業は平成22年10月1日～平成23年3月3日
4. 調査担当者は以下のとおりである。

総括　　小矢部市教育委員会 文化スポーツ課　主任 中井真タ
現地調査　㈱イピソク　　調査員 石橋夏樹
整理作業　㈱アーキジオ　　主任調査員 伊藤雅和
5. 本書の編集・執筆は、中井、石橋、伊藤が行った。なお、文責は文末に記した。
ただし、本書の自然化学分析については、パリノ・サーヴェイ㈱へ委託し、その結果を得た。
6. 本書の図・写真図版の表示は次のとおりである。
 - 1) 遺構番号は、調査現場で付した番号である。遺構の時期および種類に関わらず連番号とした。
 - 2) 遺構の略号は以下のとおりである。

SD : 川・溝、SE : 井戸、SK : 土坑、P : 穴、SX : 性格不明遺構
 - 3) 本書で示す方位は全て磁北で、水平基準は海拔高である。
 - 4) 引用・参考文献は、著者と発行年（西暦）を（　）で文中に示し、文末ごとに掲載した。
 - 5) 遺構図の縮尺は、全体図は1/200と1/300がある。遺構の詳細平面図と断面図は1/40と1/60がある。遺物図には遺物の大きさに応じて1/1、1/2、1/3、1/4、1/6がある。
 - 6) 写真図版の縮尺は、遺構は任意、遺物は基本的に1/3であるが、遺物の大きさに応じて1/1、1/4、1/6がある。
7. 出土遺物と調査に関する資料は、小矢部ふるさと歴史館で保管している。遺物の注記は、石名田木舟遺跡を示す「INDKBN」に出土地点等を併記した。また、本書に掲載した遺物は、図版毎にコンテナに入れ収蔵してある。
8. 発掘調査中および報告書作成中、関係者および関係機関から多大な御教示・御協力を得た。記して謝意を表したい。

目 次

第Ⅰ章 位置と環境	1
遺跡の位置と地形	1
歴史的環境	1
第Ⅱ章 調査に至る経緯	3
第Ⅲ章 調査の方法	5
第Ⅳ章 調査の成果	6
第1節 遺構	6
第2節 遺物	14
第Ⅴ章まとめ	18
遺構一覧表・遺物一覧表	19, 20

図版目次

図版

第1図 小矢部市位置図	1
第2図 周辺遺跡位置図（1:25,000）	2
第3図 調査位置図（1:2,500）	4
第4図 石名山木舟遺跡グリッド配置図	5
第5図～第7図 井戸 水溜による分類 I～III類	10, 11
第8図 能越道調査時の検出遺構との位置関係図（1:500）	12
第9図 遺跡全体図（1:300）	21
第10図 西側遺構図（1:200）	22
第11図 東側遺構図（1:200）	23
第12図 調査区北壁断面図（1:40）	24
第13図 SD62断面図（1:60）	25
第14図～第19図 遺構実測図（1:40, 1:60）	26～31
第20図～第29図 出土物実測図1～10（適宜）	32～41

写真目次

図版1 調査区全景（真上から）：上段、調査区全景（東から）：下段	
図版2 SD62a・b Cベルト西側（南西から）：上段、SD62a・b Cベルト東側（南西から）：下段	
図版3 SD62、SE 1、SE 2調査状況	
図版4 SE 6、SE 7調査状況	
図版5 SE15、SE17、SE23調査状況	
図版6 SE33、SE35、SE36.37、SE41調査状況	
図版7 SE46、SE50、SE63、SE64、SE67調査状況	
図版8 SE77、SE96、SE97、SE98調査状況	
図版9 SE99、SE105、SE106、SE114調査状況	
図版10 SE115、SE116、SE125、SE127調査状況	
図版11 SE128、SE129、SE133、SX122、SX130調査状況	
図版12～図版17 山上遺物写真	

第Ⅰ章 位置と環境

遺跡の位置と地形（第1図）

石名田木舟遺跡は、富山県小矢部市地崎地内に所在する。小矢部市は、富山県の西端中央に位置し、石川県に隣接する。地形は、北・西・南の三方が丘陵性山地、東が平地、中央部が台地である。山地は、北部に市内最高所である稲葉山(標高347m)から宝達山に連なる丘陵と、西方には加越国境線をなす石動丘陵があり、続く南方には医工山の北側を占める蟹谷丘陵とつながる。東側には、庄川の堆積作用によって形成された扇状地である砺波平野が広がる。中央の台地は、庄川と小矢部川が形成した河岸段丘である。今回の調査地である地崎は小矢部市の東側の市境に位置し高岡市福岡町（旧福岡町）と接しており、小矢部川と砺波平野を貫流する庄川の扇状地末端に立地している。



第1図 小矢部市位置図

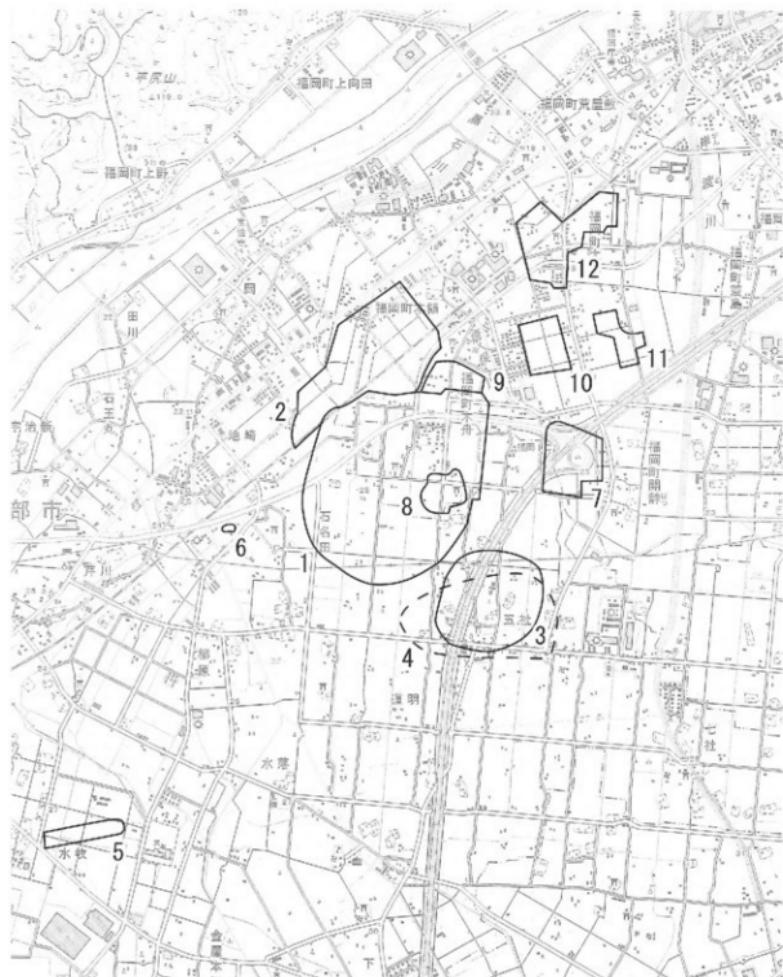
歴史的環境（第2図）

小矢部市では小矢部川左岸から山間部にかけて190以上の遺跡が確認されており、調査結果からは旧石器～中世の各時期で、豊かな内容を持つ遺跡が多く存在していることがわかっている。それとは対象的に小矢部川右岸側では確認された遺跡数は10遺跡と少なく、実際に調査されたのは石名田木舟遺跡と、同地内の地崎遺跡、近隣の五社地内に所在する五社遺跡、そして水牧地内の水牧遺跡である。

五社遺跡は古墳時代、古代、中世、の3期を中心とする遺跡である。なかでも古墳時代では同時期の市内の遺跡ばかりではなく県内で類のない、住居の壁際にカマドを備えた堅穴住居跡が検出された。古代では10世紀末から11世紀後半の集落跡では、109m（一町）方格に区画された条里地割に即した溝が検出され、続く中世では7群に分けられる掘立柱建物が確認されている。また五社地内は西へ六度偏る中世条里（型）地割がよく残っている地域で、五社条里遺跡が周知化されている。

水牧遺跡は新幹線敷設に先立つ調査で発見され、平成21年度に財團法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所による本調査では古代の集落跡が報告された。その周辺では同じ原因による調査にて小神遺跡も発見され、平成20年度に試掘調査が実施された。

今回報告する石名田木舟遺跡は、伝承1184年の築城まで歴史が遡る木舟城跡を内包し、当遺跡はその城下町として繁栄したものと考えられる。高岡市教育委員会（旧福岡町）による範囲確認調査では、上体は16世紀代であるが一部15世紀後半まで遡る出土遺物が確認されている。当遺跡の北側には、旧福岡町にかけて大きく広がる本領地崎遺跡が所在する。この遺跡は平成20年度に一部試掘調査をした結果、8世紀代と16世紀代の2時期が主体であると考えられる。推定される規模や時期から当遺跡とは深い繋がりを持つと推察される。



周辺遺跡

1	石名田木舟遺跡	5	水牧遺跡	9	木舟北遺跡
2	本領地崎遺跡	6	地崎遺跡	10	大滝芋田遺跡
3	五社遺跡	7	開跡大滝遺跡	11	大滝島田遺跡
4	五社条里遺跡	8	木舟城跡	12	大滝遺跡

※1～7は小矢部市、7～11は高岡市に分布する。このうち1・2・7は両市に分布する遺跡である。

第2図 周辺遺跡位置図 (1 : 25,000)

第Ⅱ章 調査に至る経緯

調査に至る経緯（第3図）

調査は、県営ほ場整備（経営体育成基盤整備事業）に伴うものである。事業範囲内には、「石名田木舟遺跡」と「地崎遺跡」が含まれていること、事業規模が36万m²と広範囲に及ぶことから、平成19年度に範囲内の分布調査を、平成19・20年度に試掘調査を実施し、本発掘調査範囲を確定した。その後本発掘調査範囲内のT字計画が見直されたことから、田面の削平はせずに保護盛土による遺跡の保護となった。やむをえず削平が避けられない水路や、恒久的な農道部分については平成21年度に本発掘調査を実施した。今回の調査地は、計画の変更から田面の削平が避けられず、平成22年度に本発掘調査をすることが決まったものである。

過去の発掘調査

石名田木舟遺跡は、能越自動車道の建設に伴い発見された遺跡である。今回の調査地に隣接するアクセス道内の範囲は約45,000m²あり、富山県教育委員会が主体となり、県埋蔵文化財センター、小矢部市教育委員会が平成2年度に分布調査、小矢部市教育委員会が同年度に試掘調査を実施した結果、約22,000m²の範囲で遺跡が遺存している状況を確認した。その後、財団法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所により平成3年度に詳細試掘調査後、平成5～7年度にかけて本発掘調査が実施された。複数の遺構検出面があったため、延べ56,881m²の調査面積と報告されている。調査の結果、古墳時代後期、7世紀後半～9世紀の古代集落跡、15世紀末～16世紀の中世期の城下町、近世遺構が確認された。遺跡の中心時期は、古代と中世後期である。古代では、堅穴建物、掘立柱建物、橋、溝、土坑、畠の遺構が検出された。遺物は、主に須恵器や土師器であるが、縁神陶器が1点と、墨書き土器が36点出土している。墨書き土器には寺に関する文字も認められ、能越自動車道建設に関連して行なわれた周辺の道路整備工事に伴う調査でも、宗教施設の存在を窺わせる瓦塔等が出土している。中世後期では、木舟城の城下町として繁栄したことを彷彿とさせる様様な建物跡をはじめとする遺構や、土器・陶磁器をはじめ、木製品や金属製品、石製品等の多種多様な出土遺物がみつかっており、なかでも記念銘資料となる木簡や櫛口も確認されている。

小矢部市教育委員会が平成21年度に実施した本発掘調査は、限られた面積であったものの、古代と中世の集落の一部を確認した。

(中井)



第3図 調査位置図 (1:2,500)

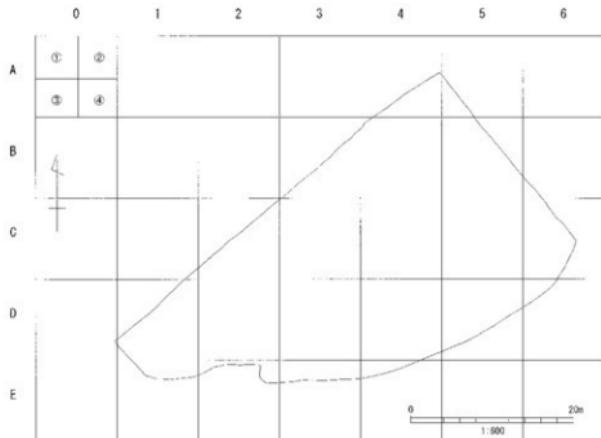
第III章 調査方法

調査を開始するにあたり、遺物の取上げと検出遺構の管理に用いるためグリッドを設定した。グリッドは世界測地系第VII系に基づいて10mごとに設定し、さらに5mごとで四分割にした小グリッドを設定した。南北方向は北からアルファベット（A、B、C…）を順に名称を付け、東西方向は西から数字（0、1、2…）を順に名称を付けた。小グリッドは北西を①、北東を②、南西を③、南東を④とした（第4図）。

表十及び試掘結果において、遺物が出土しなかったⅢ・Ⅳ層は、小矢部市教育委員会立ち会いの下、重機で掘削を行った。遺構の掘削はツルハシ・移植ゴテ・ミニ三角ホー等によって行った。

遺構番号は検出した順に番号を付けていき、遺構の種別によって記号を付けた（構 SD、井戸 SE、土坑 SK、ピット P、性格不明遺構 SX）。また、検出時は一つの遺構として認識していたが、調査を進めるにつれて複数に分かれることが判明した場合は、最初に付けた番号の後にアルファベット小文字を付けた。

基本層序は調査区の東側と西側で異なる。遺構検出面であるVI層は礫を多く含む黄褐色砂であるが、西側ではみられず黒色シルト（V層）を検出した。この黒色シルトは過去の調査において検出された低減シルト層と同一のものと考えられ（財團法人 富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所2002『石名田木舟遺跡発掘調査報告書』）、調査区の西側に広がる湿地帯を検出したと考えている。遺構検出面の直上に存在するⅢ・Ⅳ層は遺物包含層であるが、遺物は少量しか出土しなかった。今回の調査で確認できた遺構の数や、そこから出土した遺物の数が豊富であることを考えると、不自然な状況であるといえる。過去に重機を入れて整地したという地元住民の証言もあり、本米の包含層は近年の削平によって失われた可能性がある。



第4図 石名田木舟遺跡グリッド配置図

第IV章 調査の成果

第1節 遺構

本年度の調査区では溝2条、井戸33基、土坑12基、ピット85基、性格不明遺構2基の計134の遺構を検出している。遺物の所見から、遺構の年代は15世紀後半～16世紀前半に属すると考えられる。

最も大きな面積を占めるSD62a・bは中世の区画溝と考えられ、本調査区のみならず、石名田木舟遺跡全体を評価する上で重要な遺構として考えられる。また、本調査区で最も特徴的といえるのは多数検出した井戸であり、すべて石組で構築されている。その多くは深さが1mに満たないものが多い。立地上の理由のほか、第III章で述べたように過去に埋された可能性がある。当然のことながら、このことは井戸のみならず、すべての遺構に対して影響したと考えられる。その他、性格が不明な遺構を調査区北東に2基検出している(SX122・130)。

本章では上記にあげたものを主要遺構として捉え、これらについて記述する。

1) 井戸

井戸は当初21基検出し、SD62完掘後の底面でさらに12基検出した。水溜部のみが残存していたものを除き、すべて井戸側に礫を用いた石組井戸である。長梢円形の自然礫を放射状に構築することを基本とする。また、検出した当初は土坑として認識していたものが、掘削時に石組が現れて井戸と判明したものが多かった。検出当初より石組井戸と判断出来たものには、内部に大形の礫が詰まっている場合が多かった。より詳細なデータを得るために、空撮後SE134を除くすべての井戸に対して断ち割り調査を行った。

SE1 (D-3③)

石組は三段残存しており、一段目は底に据えられた桶の直上ではなく、桶の上側を囲うようにして並べられていた。水溜は底板を抜いた桶が転用されている。

SE2 (D-3④)

石組は南側より北側の残存状況が良く、南側では一段、北側では四段残存していた。水溜は曲物が転用されていた。珠洲と瓦質土器が複数出土した。

SE6 (D-5②)

検出した井戸の中では最大で、石組の長径は1.23mである。石組は四段残存していた。検出面から底までの深さは0.94mである。水溜は底板を抜いた桶が転用されており、石組の一段目は桶の上部を囲うようにして並べられていた。

SE7 (D-6①)

石組は四段残存していた。石組には石臼(上臼)が1点使用されていた。水溜は底板を抜いた桶が転用されていた。

SE15 (D-2③)

石組は二段残存していた。水溜は丸太を刎り貰いたものが使用されていた。

SE17 (D-3②)

石組は三段残存していた。水溜は木摺臼の下臼が転用されていた。軸木が嵌る部分がちょうど穴となっているため、湧水は内部に浸入してくるが、側壁が存在しないため、土砂と遮断する役目のものが存在しない。

SE23 (D-2④)

石組は二段残存していた。方形に成形された石が出土しており、五輪塔の地輪である可能性がある。水溜には丸太の刎り貰きが設置されていた。

SE33 (D-2②)

石組は二段残存していた。水溜は底を抜いた桶が転用されていた。

SE35 (D-2②)

石組は五段残存していた。水溜は曲物が転用され、上下二段に積まれていた。

SE36 (D-1②)

石組は五～六段残存していた。底部から薄い木片が多く出土したことから、水溜には曲物が用いられていたと推測出来る。

SE37 (D-1②・D-2①)

石組は五段残存していた。底部から薄い木片が多く出土していることから、SE36 同様に水溜には曲物が用いられたと推測出来る。

SE41 (D-2①)

検出面では石組はみられず、掘削開始後に石組を検出した。石組は五段残存していた。水溜を設置せず、底部まで石組が続く石敷きとなっていた。

SE46 (D-3①)

石組は五～六段残存していた。水溜は曲物が転用されていた。

SE50 (C-3④)

石組は四段残存していた。水溜は曲物二段である。

SE63 (D-4①)

石組は二段残存していた。水溜は曲物が転用されていた。

SE64 (D-4①)

検出面では石組はみられず、掘削開始後に石組を検出した。石組は二～三段残存していた。水溜は曲物が転用されていた。

SE67 (D-5②)

石組は二段残存し、石組には石臼の上臼と下臼が 1 点づつ転用されていた。水溜は曲物が転用されていた。

SE77 (C-5②)

石組は四～五段残存していた。水溜には木臼の上臼が転用されていた。

SE96 (C-4③)

検出面では石組はみられず、掘削開始後に石組を検出した。石組は二～三段残存していた。水溜は曲物二段である。

SE97 (B-4③)

検出面では石組はみられず、掘削開始後に石組を検出した。石組は六段残存していた。水溜は曲物二段である。

SE98 (B-4③)

石組は五段残存していた。水溜は曲物が転用されていた。

SE99 (B-4③)

検出面では石組はみられず、掘削開始後に石組を検出した。石組は五段残存していた。水溜は曲物が転用されていた。

SE105 (C-4④)

検出面では石組はみられず、掘削開始後に石組を検出した。石組は三段残存していた。水溜は曲物が転用されていた。

SE106 (C-4③)

SD62a の底面で検出した。石組は二段残存していた。水溜は曲物二段である。

SE114 (C-4④)

SD62a の底面で検出した。石組は一段目の一部のみ残存していた。水溜は曲物二段である。しかし、他の例は上下の曲物が一体となって出土したのに対し、少しずれて出土している。

SE115 (C-4③)

SD62a の底面で検出した。石組は三～四段残存していた。水溜は曲物が転用されていた。

SE116 (C-4③)

SD62a の底面で検出した。石組は二段残存していた。水溜は曲物が転用されている。

SE125 (B-5④)

SD62b の底面で検出した。石組は一段目の一部のみ残存していた。水溜は木臼の転用品と考えられ、他のものと同様に底抜けとなっている。

SE127 (B-4③)

石組は五段残存していた。水溜は曲物二段である。

SE128 (A-5①)

石組は七段残存していた。内部より五輪塔の火輪が出土している。水溜は石敷きとなっていた。

SE129 (A-5①)

SD62a の底面で検出した。石組は二段残存していた。水溜は曲物が転用されていた。

SE133 (B-4④)

石組は二段残存していた。水溜は曲物二段である。

SE134 (D-4①)

SD62a の底面より出土した曲物である。石組井戸の水溜のみが残存していたものと推測される。検出範囲のみ記録し、断ち割り調査は実施しなかった。

2) 溝

SD62 (D-3③・④、E-3①・②、A-4④、A-5③、B～D-4、B-5、C-5①～③、D-5①・③)

検山時は一つの遺構として捉えていたが、掘削開始後まもなく 2 条の溝に分かれることが判明し、遺構名を SD62a、SD62b とそれぞれに別の名称を付けた。2 つの溝の間には境を明確にする中州部分が存在し、約 3 m の間隔を持って並行に走る。

SD62a

SD62b と並行に延びており、深さも約 40cm とほぼ共通する。E-4 グリッド以西では方向を直角に変えているが、約 10m で途切れています。SD62b と異なる点は、底面で遺構を多数検出したことがあげられる。特に C-4③・D-4①付近では、SD63・64・106・114・115・116・134 を検出した井戸の密集域があり、SD62a はこれらの井戸の廃絶後に構築されたと考えられる。そのすぐ北側において、直径 10cm 程度の小ピット群を、溝の底面で 9 つ検出した (C-4③・④)。これらは対になって整然と並んでいたため、橋脚の可能性が考えられよう。

SD62b

SD62a と南北へ並行に延びている。北端の調査区壁付近からは、木製品が多量に出土した。木製品を含む褐色粘土層は E ベルト断面では確認されたが、D ベルトでは確認出来なかった。E ベルト以北で土質が水分を豊富に含んだものに変わり、そのために保存状態が良好であったと考えられる。

3) 性格不明遺構

調査区北東端で、平面形が不整形を呈する性格不明な遺構を 2 基検出した。

SX122 (B-4①・②・③)

調査区壁にかかっていたため全体形は不明だが、検出された部分は瓢箪形を呈する。覆土は褐色～黒色シルトと青灰～灰黄褐色シルトの相互堆積であり、調査区内で検出した他の遺構とは明確に異なるものであった。時期が異なる可能性も検討したが、出土遺物からの時期差は見られなかつた。水分を多く含んだ上質であったため、漆器・箸・下駄等木製品も多く出土している。

SX130 (B-4①)

SX122 の東側に隣接しており、断面観察から北側が土坑状に窪むことが判明した。

小結

(1) 井戸について

井戸はすべて石組で構築されていたが、水溜に何が用いられているかによって分類が可能である。ここでは井戸の水溜に用いるために作られたと考えられる専用品(Ⅰ)と、既製のものを設置したと考えられる転用品(Ⅱ)、何も設置せず石敷きとしたもの(Ⅲ)の三つに分類した。

I 専用品

専用品は丸太削り貫き材を用いているもので、

SE15 (D-2③)・23 (D-2④) が該当する。直径
35~40 cmの丸太を用いている。

II 転用品

転用品には、曲物・桶・木臼・木擂臼があり、曲物が23例と最も多い。曲物には大きさに違いが見られ、平面形態も円形のものだけでなく長楕円形のものも確認できた。また、曲物は二段に重ねられて使用されたものもある(SE35・50・96・97・106・114・127・133)。桶は井戸側の石の積み方がⅠ・Ⅲ類及びⅡ類のその他転用品とは異なり、水溜上側の周りから上に積んでいくという手法が取られている。3例存在する。

木臼はSE125 (B-5④)だけに用いられ、底部が存在しなかった。木臼を再加工し、底部が抜

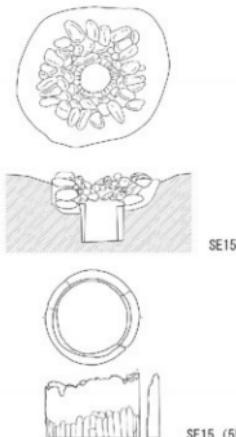
かれたものと思われる。SE17 (D-2②)とSE77 (C-5②)は木擂臼を転用したものであり、SE17は下臼を、SE77は上臼がそれぞれ用いられている。

III 石敷き

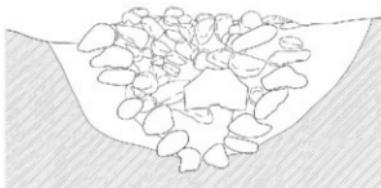
石敷きのものはSE41 (D-2①)・128 (A-5④)が該当する。断ち割り時の観察では、石組を鉤状に組むことによって構築されていることが判明した。

以上、水溜に着目して分類を行った。Ⅱ類とした転用品が最も数が多い。Ⅱ類のうち、曲物と桶については、石組井戸の水溜に用いられている例は多数あるが、木臼や木擂臼については、少なくとも石名田木舟遺跡の過去の調査では例が無い。

Ⅱ類に共通する点を見出そうとすれば、円形の木製品で底部が無いということが挙げられる。底部は再加工で除去することが可能であるため、円形の木製品であれば水溜に転用する対象となり得たと考えられる。実際に転用されている

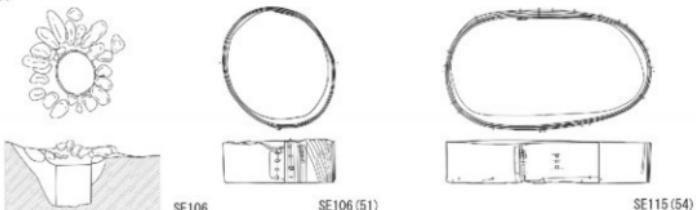


第5図 I類 専用品

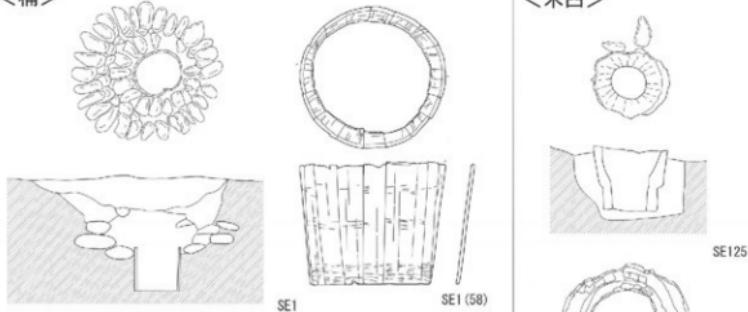


第6図 III類 石敷き

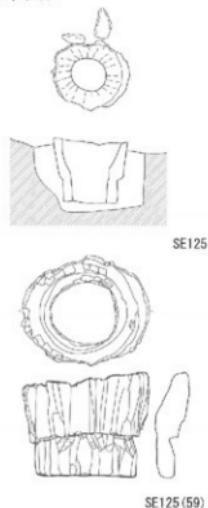
<曲物>



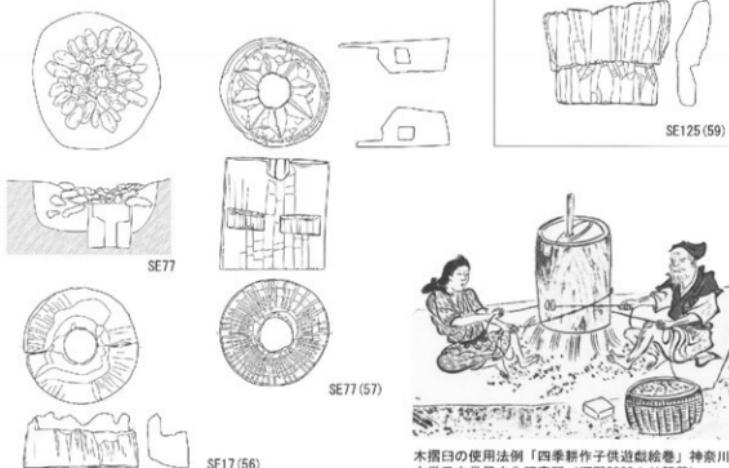
<桶>



<木臼>



<木搗臼>



第7図 II類 転用品集成図(縮尺不同)

※ 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2002『石名田木舟遺跡発掘調査報告書』付図・中世5、中世6より一部転載し、平成22年調査区を合成したもの



第8図 能越道調査時の検出遺構との位置関係図 (1:500)

本製品が数種類に及んでいることからは、再利用できるものを検索していったことが伺える。I・III類は今回の調査では数が少ないが各2例ずつあり、過去の石名田木舟遺跡の調査でも例がみられる事から、遺跡全体では一定量存在したと予想される。

(2) SD62について

本調査区南側に隣接する地点では、能越自動車道設に伴う発掘調査が行われている（富山県文化振興財団 2002）。その調査で検出された SD7002 は方形に巡る武家屋敷の区画溝と報告されており、当時の調査区では收まりきらず本調査区側へ延びている。この溝は本調査区の SD62 につながるものと思われ、ちょうど調査区の境付近で直角に曲がるものと考えられる。さらに SD7002 とともに検出されている SD7030 も区画溝と報告されており、SD7002 との組み合わせで方形に区画された武家屋敷と想定されている。それらの所見と本調査区での調査結果はほぼ合致し、SD62 を組み合わせることにより方形の区画である可能性がさらに高まった。二条に分かれり並行に走ることについては、同時に存在したのか、それとも作り替えが行われたのかが問題となる。出土遺物からは年代観に差は見られず、ともに 15 世紀後半～16 世紀前半であった。しかし、断面観察では SD62b よりも SD62a が新しいと判断出来ることから（C ベルト）、作り替えが行われた可能性がより高いといえる。

（石橋）

＜参考文献＞

- 財団法人 富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所 2002『石名田木舟遺跡発掘調査報告書—能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告書III—』
鍛方正樹 2003『井戸の考古学』同成社
河野通明 2008「身体技法の違いにもとづく古代日本列島の民族分布の復元」『身体技法・感性・民具の資料化と体系化』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議
小矢部市教育委員会 2010『小矢部市埋蔵文化財調査報告書第 66 冊 石名田木舟遺跡発掘調査報告書—ほ場整備（経営体育成基盤整備事業）地崎地区に伴う埋蔵文化財調査—』
小矢部市教育委員会 2010『小矢部市埋蔵文化財調査報告書第 67 冊 石名田木舟遺跡発掘調査報告書—農道整備事業に伴う埋蔵文化財調査— 桜町遺跡発掘調査報告書—道の駅整備事業・誘導案内板設置に伴う埋蔵文化財調査—』

第2節 遺物

今回の調査で出土した遺物は、中世後半のものが大半を占め 15世紀後半～16世紀前半を主体とする。珠洲については、吉岡康暢の分類及び年代観（吉岡 1994）、土師器皿については、梅原胡摩堂遺跡の分類及び年代観（財団法人 富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所 1996）、青花については、小野正敏による分類及び年代観（小野 1982）、青磁については、横田賢次郎・森田勉の分類案（横田・森田 1978）を基に修正・加筆された大字府条坊跡の分類及び年代観（大字府市教育委員会 1983・1984）を参考とした。

SD62a (図 20 : 1~20)

土師器皿（1~8）、珠洲（9）、青花（10）、青磁（11・12）、瓦質土器（13）、瀬戸美濃（14）、漆器（15~17）、加工板材（18）、箸（19・20）を図化した。1~8は土師器皿である。1はロクロ成形で底部と体部との境に明瞭な稜線を残すRG類の15世紀後半に相当する。なお、今回の調査では未図化の破片資料を含めてロクロ成形の土師器皿はこの1点のみの出土である。2~8は手捏成形の土師器皿で、2がNG類の13世紀後半～14世紀後半、3~8はNJ類の15世紀後半～16世紀末に相当する。1・3~5には口縁端部に1箇所、6は口縁端部全体に帶状の煤が付着する。9は珠洲擂鉢である。口縁部を外折させ、口縁端部に櫛目状波紋状を施す。擂目は6条1単位とし、間隔は密である。V～VI期の14世紀後半～15世紀後半に相当する。10は青花皿である。口縁部を外折させ、割口には漆繼のための漆が付着する。皿B1群の15世紀後半～16世紀前半に相当する。11・12は青磁碗である。11は端反の口縁部で、内外面に紋様を配する。12は底部片で、外面に連弁紋を配する。いずれもIV類に相当し、14世紀初頭～15世紀代と考えられる。13は瓦質土器浅鉢の底部片で、脣部下端に1条の凸帯を巡らせる。底面には離れ砂が付着する。14は瀬戸美濃の水指しの持ち手部分と考えられ、褐色の釉薬が施される。15~17は漆器碗である。15は細片で内外面黒色漆地に、赤色漆で木葉を描く、16は厚手の底部よりやや外側に開いた高台で、内外面黒色漆地で赤色漆による紋様は無し。17は短く幅広の高台で、内外面黒色漆地に赤色漆で紋様を描くが、破片のため何紋かは不明。18は加工板材で2箇所の木釘穴が穿たれ、そのうちの1箇所には木釘が残る。用途不明。19・20は箸で、中央の断面形状は四角形で両端が細くなる。

SD62 b (図 20 : 21~図 22 : 41)

土師器皿（21・22）、珠洲（23）、青磁（24）、輪羽口（25）、鋸（26）、錢貨（27）、木札（28）、獅子頭（29）、漆器椀（30）、加工板材（31~34）、箸（35~39）、板碑（40）、下駄（41）を図化した。21・22は土師器皿である。いずれも手捏成形のNJ類で15世紀後半～16世紀前半に相当する。22は口縁端部の少し内側に帶状の煤が残る。23は珠洲擂鉢である。生焼けにより灰黄褐色を呈し、口縁端部の波状紋は消失する。擂目は7条1単位とし、間隔は開く。VI～VII期の15世紀半ば～15世紀末に相当する。24は青磁碗底部である。底部の周囲は意図的に打ち欠いて円盤状となる。見込みは、一重圓線内に紋様を配する。IV類の14世紀初頭～15世紀代に相当か。25は輪羽口である。被燃により表面は赤変硬化し、溶解物が付着する。26は鋸である。刃部分は腐食により欠損する。27は錢貨である。鋸の付着により詳細は不明であるが、下が「大」、右が「通」、左が「寶」と判読できることから、78と同じ元銭で1310年を初鑄とする「至大通寶」か。28は木札である。頂部に切込みが入り、下部にかけて細くなるが、下半分は欠損する。背面に墨

書が認められ一方は「いと□□」、もう一方は「たい□□」である。29は獅子頭である。眉・口・鼻・口・上顎を切込みにより表現し、眉と鼻の左右を墨で黒く塗る。また、目の周囲と鼻を赤色顔料で塗る。裏面は段が設けられ、この部分が下顎と組み合うと考えられる。なお、頂部にも1箇所の切込みが認められる。30は漆器碗の口縁部である。底部及び高台は欠損する。黒色漆地に赤色漆で丸に沢湯？を描く。76と同紋様か。31は加工板材である。長軸側の一端を斜めに切り落とす。用途不明。32・33は円形の加工板材である。側面の木釘穴は認められず、33は1箇所の継じ皮が認められる。34は長方形の加工板材である。厚さ1mmと薄く、削り屑か？35～39は箸である。35・36は一端が欠損し、37～39は完形。断面の形状は5～7角形で、両端が細くなる。40は板碑である。頂部は三角形で、下端の一部は欠損する。梵字（バーン）が刻まれる。41は連歯下駄である。前歯はほぼ中央に、後歯はやや後ろ側に穿たれる。左右は不明。

SE1 (図22:43・44、図25:58)

青花（43・44）、水溜転用材（58）を図化した。43・44は青花皿である。43はわずかに内湾する口縁部、44は碁笥底の底部である。いずれもC群の15世紀後半～16世紀前半に相当する。58は小桶を転用した水溜である。17枚の側板を組み合わせて、上段・中段・下段の3箇所をタガによって留める。内面の下端に底板をはめ込むための圧痕が残る。

SE2 (図22:47、図27:61)

珠洲（47）石製暖房具（61）を図化した。47は珠洲甌の口縁部である。1条の稜線を巡らせた方頭の口縁部で、胴部の張りは弱い。V～VI期の14世紀後半～15世紀後半に相当する。61は長方形の暖房具で、内面に削り抜き時の鑿痕が残る。内面は全面に煤が付着する。梅原胡摩堂遺跡より同様のものが確認されるが、底部の四隅に方形の脚が付くのに対し、本遺跡出土のものは無脚である。

SE7 (図22:42、図27:62)

土師器皿（42）、五輪塔？（62）を図化した。42は土師器皿である。底部中央は火彫れが認められ、内面に漆が付着する。NG類の13世紀後半～14世紀後半に相当する。62は五輪塔の地輪或いは板碑の下端と考えられる石製品である。一部被焼により煤が付着する。

SE15 (図24:55)

水溜転用材（55）を図化した。55は丸太の削り貫きで、底面は水平に加工される。また側面は下部を縦方向に削り取る。

SE17 (図24:56)

水溜転用材（56）を図化した。56は木摺臼の下臼を転用したもので、上面に中央の穴より外側へと直線的に延びる溝が刻まれるが、摩滅及び腐食のため残りは非常に悪い。

SE23 (図27:64)

五輪塔（64）を図化した。64は五輪塔の地輪である。頂部の中央がやや窪む。

SE36 (図28:65)

石臼（65）を図化した。65は石臼の下臼である。中央に円形の穴が空き、上臼と接する上面には、中央の穴より放射状に広がる溝が刻まれる。

SE67 (図26:60、図28:66・67)

加工板材（60）、石臼（66・67）を図化した。60は加工板材である。両面に細かい擦痕が認められ、5箇所の穴が穿たれる。断面は皿状で両端が持ち上がり、凹側には擦痕が明瞭に残る。一部は被熱により炭化する。用途不明。66・67は石臼である。66は下臼で中央に円形の穴が空き、上臼と接する上面には、中央の穴より放射状に広がる溝が刻まれる。67は上臼である。下臼と接する下面には、中央の軸穴より放射状に広がる溝が刻まれる。上面には、もの入れの穴が1箇所あり、側面には引き手を差し込むための方形の穴が穿たれる。

SE77（図 25：57）

水溜転用材（57）を図化した。57は木桶臼の上臼を転用したもので、底面に中央の穴より放射状に延びる溝が刻まれる。側面には4箇所の長方形の穴が穿たれる、上端面に1箇所のU字の割り抜きが認められる。内面は8つの頂点を持つ星型に削り抜かれる。

SE96（図 23：52）

水溜転用材1点を図化した。52は曲物を転用したもので、上タガと下タガの2箇所を用いて側板を固定する。内面のケビキはほぼ中央で上下に分割して施される。

SE99（図 22：45・48）

珠洲（45）、漆器椀（48）を図化した。45は水平面を有する口縁端部に波状紋が巡り、内面には口縁部直下に捕口が全面に施される。IV2～V期の14世紀前半～15世紀前半と考えられる。48は漆器椀の底部である。口縁部及び高台は欠損する。黒色漆地に赤色漆で扇？を描く。

SE106（図 23：51）

水溜転用材1点を図化した。51は曲物を転用したもので、内面に直線及び斜め方向のケビキを施す。底面に木釘穴は認められない。

SE114（図 22：50）

水溜転用材1点を図化した。50は曲物を転用したもので、上タガと下タガの2箇所を用いて側板を固定する。内面のケビキは直線的に施す。

SE115（図 24：54）

水溜転用材（54）を図化した。54は長円形の曲物で、底面には22箇所の木釘穴が残る。内面のケビキ痕は一部にしか認められない。

SE116（図 22：49）

加工板材（49）を図化した。49は円形の加工板材である。側面に木釘穴は認められない。表面の一部に擦痕が残る。用途不明。

SE125（図 26：59）

水溜転用材（59）を図化した。59は木臼を転用したもので、側面の中央やや下よりに抉りを入れる。

SE128（図 22：46、図 27：63）

珠洲（46）、五輪塔（63）を図化した。46は珠洲擂鉢である。口縁部は外折し口縁端部に横口状波状紋を施す。擂目の単位は不明である。V～VI期の14世紀半ば～15世紀後半に相当する。63は五輪塔の火輪である。軒の反りは弱く、頂部には窪みが認められる。

SE129（図 24：53）

水溜転用材（53）を図化した。53は長円形の曲物で、底面には7箇所の木釘穴が残る。内面にはケビキ痕は認められない。

SK68 (図 29 : 68・69)

上師器皿 (68・69) を図化した。68・69 は上師器皿である。いずれも手捏成形による小型の皿で、68は厚手で丸底の底部で、口縁端部に煤が帶状に付着する。NC類の13世紀後半～14世紀代である。68は扁平な底面より口縁部を1段ナデのより短く立ち上げるND類の12世紀後半～15世紀代である。

SK97 (図 29 : 70)

上師器皿 (70) を図化した。手捏成形で厚手で扁平な底面より、外側へと直線的に開く口縁部を有する。NG類の15世紀後半～16世紀末に相当する。

SX122 (図 29 : 71～76)

上師器皿 (71・72)、珠洲 (73)、青磁 (74)、鞘 (75)、漆器椀 (76) を図化した。71・72 は上師器皿である。いずれも手捏成形で、口縁部を強いヨコナデにより外反させる。NJ類の5世紀後半～16世紀末に相当する。73 は珠洲櫛鉢である。口縁端部の内面に描かれる櫛目状波状紋は、他の櫛鉢とは異なり口縁端部よりもやや下った部分に幅2～3mm程度の荒い単位で施される。VI～VII期の15世紀半ば～15世紀末に相当する。74 は青磁碗の底部である。見込みは1重圓線内に花紋を描く。碗IV類の14世紀初頭～15世紀代に相当か。75 は刀子の鞘である。断面長円形の木材を縱方向に半裁し、内部の一方を長方形に切り抜いて茎を収める。表面は黒色漆地で、1mm～1.5mm 幅の紐によって、3～4mm 間隔の螺旋巻きによって綴じ合わせる。76 は漆器椀の口縁部～底部である。口縁端部は欠損する。黒色漆地に赤色漆で、丸に沢渦？紋散らしを描く。

P65 (図 29 : 78)

錢貨 (78) を図化した。1310年初鈔の「至大通寶」である。

包含層 (図 29 : 77・79～81)

輪羽口 (77)、錢貨 (79～81) を図化した。77 は輪羽口である。被熱により赤変する。79～81 は古錢である。79・80 は北宋錢で、それぞれ 1111 年初鈔の「政和通寶」、1068 年初鈔の「熙寧元寶」である。81 は 1863 年初鈔の「文久永寶」で、文体は草文で裏面は波錢である。

(伊藤)

参考文献

横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府山上の輸入中国陶磁器について」

『九州歴史資料館研究論集』4

小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.10

大宰府市教育委員会 1983 「大宰府条坊跡II」『大宰府の文化財』7

大宰府市教育委員会 1984 「大宰府条坊跡III」『大宰府の文化財』8

吉岡康鶴 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館

中世土器研究会編 1995 『概説 中世の上器・陶磁器』

財団法人 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 1996 『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告

(遺物編) 一東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告 II』－(第一分冊)

第V章　まとめ

遺構

遺構は井戸、溝、土坑、ピット、性格不明遺構を確認した。石組で構築された井戸は33基を検出した。その水溜施設には、おもに底部を貫いた状態にした「丸太削り貫き材」・「曲物」・「桶」・「木臼」・「木摺臼」を使用している。溝は2条を検出し、その出土遺物からは年代鏡に差は見られないが作り替えが行われたものと考えられる。この溝は、調査区の南側で実施された能越自動車道建設に伴う発掘調査（富山県文化振興財団2002）において検出されたSD7002につながる可能性が高い。SD7002は方形を巡る武家屋敷の区画溝と報告されている。土坑は12基で遺物は中世土師器、珠洲、瓦質土器、瀬戸美濃を伴う。ピットは85基検出し、中世土師器や珠洲など中世の遺物とともに須恵器や土師器が混入していた。性格不明遺構は2基で、このうちSX122からは中世土師器や珠洲と共に漆器や鞘などの木製品が出土した。これらの遺構の時期は、共伴遺物から、15世紀後半～16世紀前半に属するものと考えられる。

また、溝（SD62a）の底面で直径10cm前後のピットを9個検出した。溝の幅は3.5m前後あり、それに直交して30～40cmの間隔で4～5個のピットがほぼ並列していた。このことから、橋脚の可能性を考えている。

検出した遺構は全般的にその掘り込みが浅い。これはその検出面の直上の遺物包含層の希薄な遺存状況と鑑みて、昭和30年代に実施されたば場整備によって削平されたものと考えられる。したがって遺物包含層は二次堆積層の可能性が極めて高い。

遺物

遺物は木製品をはじめ石製品や、中世土師器、珠洲、青磁、青花、瀬戸美濃、瓦質土器、錢貨など中世の遺物が主体的であった。これらの遺物は遺構から出土したものが全体量の80%以上を占める。

井戸の水溜に転用されていた曲物や桶、木臼や木摺臼などは良好な状態で残っていた。これは当地が県内でも有数の湧水地帯であることから現在でも地下水が豊富であることによって護られていたといえる。溝や土坑からは箸や漆器などさまざまな生活の道具類が出土しており、なかでも獅子頭は完形品とみられ、県内でも類例がない。小型でありながら彫刻が施され、赤色塗顔料と墨で色付けされた手の込んだ作りで仕上げられている。

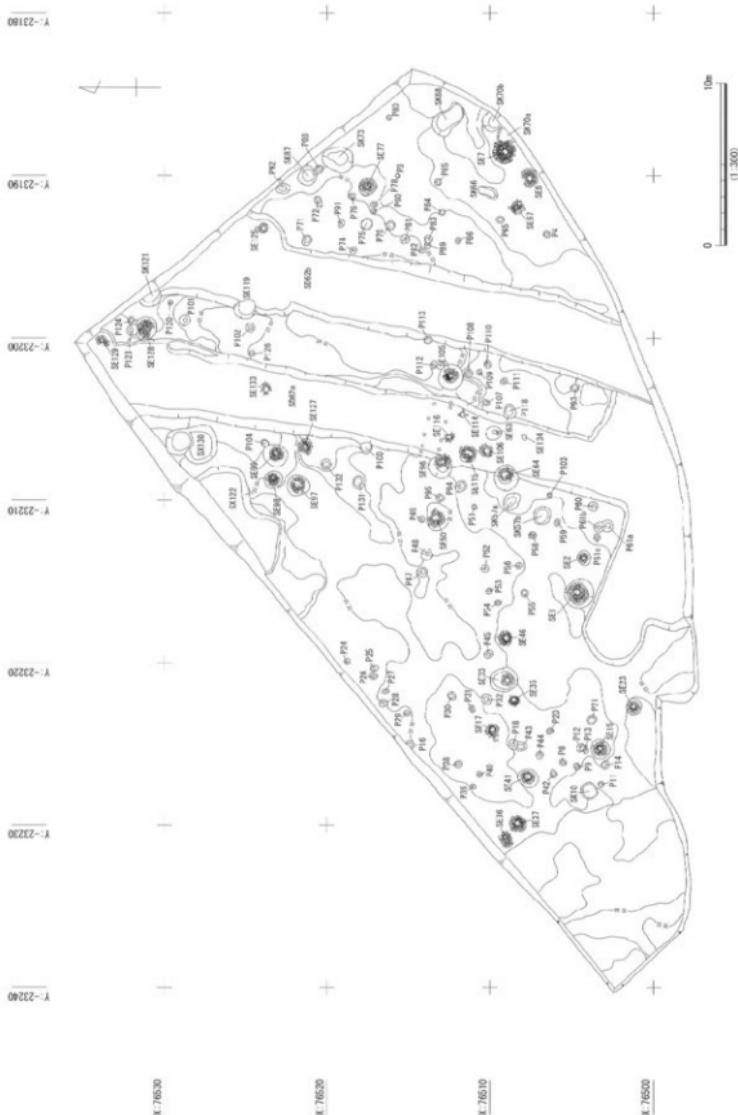
今回の出土品にわずかであるが古代やそれ以前の時期の遺物が混入していた。これは周辺に古代の遺構を検出していることから流入してきた可能性が大きい。

※井戸の水溜施設として使用された木摺臼をはじめとする木製品等について、富山民俗の会代表の佐伯安一先生、砺波郷土資料館主任学芸員の安ヶ川恵子氏から数々のご教示を賜った。記して感謝申し上げたい。

(中井)

表2 遗物一覽表

番号	品目	規格	本体寸	本体寸 (寸) 段々・厚さ 厘米		色調	状態	備考
				幅	高			
1	SDE06	小音響器	無	口径(7.4)、高さ(2.0)、厚さ(3.8)		07772 黒灰色	良品	レバーレス、自接端子保有
2	SDE04	手写入力機	無	口径(6.7)、高さ(1.9)		2.51512 黑灰色	良品	未使用
3	SDE02	中音響器	無	口径(5.8)、高さ(2.0)		2.51512 黑灰色	良品	未使用
4	SDE04	手写入力機	無	口径(6.8)、高さ(1.9)		2.51512 黑灰色	良品	未使用
5	SDE02	中音響器	無	口径(5.8)、高さ(2.0)		31772 黑灰色	良品	未使用
6	SDE02	中音響器	無	口径(5.8)、高さ(2.0)		2.51712 黑灰色	良品	未使用
7	SDE05	中音響器	無	口径(5.9)、高さ(2.3)		2.51512 黑・白・黄色	良品	未使用
8	SDE02	中音響器	無	口径(5.8)、高さ(2.0)		87772 白・灰色	良品	未使用
9	SDE04	手写入力機	無	口径(6.4)、高さ(1.6)		31612 黑・白色	良品	未使用
10	TDE05	音響器	無	口径(19.2)、高さ(2.2)		11772 黑・白色	良品	未使用
11	SDE04	手写入力機	無	口径(12.0)、高さ(3.6)		-	良品	未使用
12	SDE05	手写入力機	無	口径(14.1)、高さ(3.6)		-	良品	未使用
13	SDE04	瓦特音響器	人形	高さ(7.5)		2.31712 黑・白色	良品	未使用
14	SDE04	瓦特音響器	人形	高さ(7.5)		2.31712 黑・白色	良品	未使用
15	SDE04	手写入力機	無	口径(11.0)、高さ(6.0)		断面剥離	良品	端子部で塗装剥離
16	SDE02	中音響器	無	口径(5.8)、高さ(2.0)		白	良品	未使用
17	SDE04	手写入力機	無	口径(6.8)、高さ(1.6)		-	底面(5.2)	黒地に銀色端子
18	SDE04	手写入力機	無	口径(6.8)、高さ(2.0)		-	元品	未使用
19	SDE04	手写入力機	無	口径(6.8)、高さ(2.0)		-	元品	未使用
20	SDE04	手写入力機	無	口径(6.8)、高さ(2.0)		-	元品	未使用
21	SDE04	手写入力機	無	口径(6.8)、高さ(2.0)		-	元品	未使用
22	SDE04	手写入力機	無	口径(7.5)、高さ(2.5)		2.51712 黑・白色	良品	未使用
23	SDE04	手写入力機	無	口径(7.5)、高さ(2.5)		2.51712 黑・白色	良品	未使用
24	SDE04	手写入力機	無	口径(7.5)、高さ(2.5)		白	良品	未使用
25	SDE04	手写入力機	無	口径(7.5)、高さ(2.5)		白	良品	未使用
26	SDE04	手写入力機	無	口径(7.5)、高さ(2.5)		白	良品	未使用
27	SDE04	手写入力機	無	口径(7.5)、高さ(2.5)		白	良品	未使用
28	SDE04	手写入力機	無	口径(7.5)、高さ(2.5)		白	良品	未使用
29	SDE04	手写入力機	無	口径(7.5)、高さ(2.5)		白	良品	未使用
30	SDE04	手写入力機	無	口径(7.5)、高さ(2.5)		白	良品	未使用
31	SDE04	手写入力機	無	口径(7.5)、高さ(2.5)		2.51512 黄褐色	良品	口径(2.2)
32	SDE04	手写入力機	無	口径(7.5)、高さ(2.5)		2.51712 黄褐色	良品	口径(2.2)
33	SDE04	手写入力機	無	口径(7.5)、高さ(2.5)		白	良品	口径(2.2)
34	SDE04	手写入力機	無	口径(7.5)、高さ(2.5)		白	良品	口径(2.2)
35	SDE04	手写入力機	無	口径(7.5)、高さ(2.5)		白	良品	口径(2.2)
36	SDE04	手写入力機	無	口径(7.5)、高さ(2.5)		白	良品	口径(2.2)
37	SDE04	手写入力機	無	口径(7.5)、高さ(2.5)		白	良品	口径(2.2)
38	SDE04	手写入力機	無	口径(7.5)、高さ(2.5)		白	良品	口径(2.2)
39	SDE04	手写入力機	無	口径(7.5)、高さ(2.5)		白	良品	口径(2.2)
40	SDE04	手写入力機	無	口径(7.5)、高さ(2.5)		白	良品	口径(2.2)
41	SDE04	手写入力機	無	口径(7.5)、高さ(2.5)		白	良品	口径(2.2)
42	SUT	中音響器	無	口径(7.0)、高さ(2.1)		EY6-2 黑・白色	良品	未使用
43	SEJ1-1	電卓	青花	口径(9.0)、高さ(1.2)		07772 黑・白色	良品	未使用
44	SEJ1-1	電卓	青花	口径(10.5)、高さ(0.7)		07772 黑・白色	良品	未使用
45	SQ99	時計	黒	直径(4.9)		2.51512 黑・白色	良品	未使用
46	SQ128	時計	黒	直径(4.0)、高さ(3.4)		51112 黑・白色	良品	未使用
47	SQ2	時計	黒	直径(9.7)		2.31712 黑・白色	良品	未使用
48	SQ99-T	万能計	黒	直径(8.9)		07772 黑・白色	良品	未使用
49	SQ116	万能計	黒	直径(22.7)、高さ(3.6)		-	欠陥	画面地に黒斑
50	SQ114	万能計	黒	直径(28.8)、高さ(3.4)、幅(22.3)		-	欠陥	画面地に黒斑
51	SQ105	万能計	黒	直径(32.7)、高さ(3.4)、幅(25.6)		-	欠陥	画面地に黒斑
52	SQ96	万能計	黒	直径(41.3)、高さ(19.2)、幅(31.3)		-	欠陥	画面地に黒斑
53	SQ129	万能計	黒	直径(65.6)、高さ(25.8)、幅(58.7)		-	欠陥	画面地に黒斑
54	SQ113	万能計	黒	直径(62.0)、高さ(27.0)、幅(51.2)		-	欠陥	画面地に黒斑
55	SQ115	万能計	黒	直径(62.0)、高さ(27.0)、幅(51.2)		-	欠陥	画面地に黒斑
56	SQ115	万能計	黒	直径(39.0)、高さ(35.6)、幅(26.9)		-	欠陥	画面地に黒斑
57	SQ116	万能計	黒	直径(39.0)、高さ(34.5)、幅(26.9)		-	欠陥	画面地に黒斑
58	SQ117	万能計	黒	直径(33.0)、高さ(33.4)、幅(26.5)		-	欠陥	画面地に黒斑
59	SQ115	万能計	黒	直径(44.7)、高さ(41.6)、幅(37.9)		-	欠陥	画面地に黒斑
60	SQ125	万能計	黒	直径(62.0)、高さ(33.7)、幅(56.7)		-	欠陥	画面地に黒斑
61	SQ6-T	加工工具	無	直径(17.0)、高さ(13.5)、幅(1.0)		-	大損	画面地に黒斑・欠陥・剥離・穴あき
62	SQ2	電卓	黒	直径(10.4)、高さ(10.0)、幅(3.0)		-	欠陥	画面地に黒斑・整数
63	SQ2	電卓	黒	直径(21.4)、高さ(15.0)、幅(3.4)		-	欠陥	画面地に黒斑
64	SQ7	電卓	黒	直径(26.0)、高さ(14.7)		-	欠陥	画面地に黒斑
65	SQ126	五輪型	黒	直径(25.4)、高さ(22.4)、幅(16.6)		-	大損	画面地に黒斑
66	SQ23	万能計	黒	直径(25.9)、高さ(17.3)		-	欠陥	画面地に黒斑
67	SQ36	万能計	黒	直径(34.1)、高さ(8.2)		-	欠陥	画面地に黒斑
68	SQ67	万能計	黒	直径(32.0)、高さ(11.4)		-	欠陥	画面地に黒斑
69	SQ67	万能計	黒	直径(26.6)、高さ(11.4)		-	欠陥	画面地に黒斑
70	SQ68	万能計	黒	直径(36.0)、高さ(8.2)		2.51512 黑・白色	良品	未使用
71	SQ69	万能計	黒	直径(36.0)、高さ(8.2)		2.51512 黑・白色	良品	未使用
72	SQ122	五輪型	黒	直径(25.4)、高さ(22.4)、幅(16.6)		-	大損	画面地に黒斑
73	SQ23	万能計	黒	直径(25.9)、高さ(17.3)		-	欠陥	画面地に黒斑
74	SQ36	万能計	黒	直径(34.1)、高さ(8.2)		-	欠陥	画面地に黒斑
75	SQ67	万能計	黒	直径(32.0)、高さ(11.4)		-	欠陥	画面地に黒斑
76	SQ67	万能計	黒	直径(26.6)、高さ(11.4)		-	欠陥	画面地に黒斑
77	SQ68	万能計	黒	直径(36.0)、高さ(8.2)		2.51512 黑・白色	良品	未使用
78	SQ69	万能計	黒	直径(36.0)、高さ(8.2)		2.51512 黑・白色	良品	未使用
79	P65	吸虫	黒	内径(4.5)、外径(5.5)、厚さ(1.3)		11772 黑・白色	良品	未使用
80	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
81	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
82	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
83	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
84	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
85	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
86	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
87	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
88	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
89	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
90	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
91	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
92	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
93	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
94	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
95	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
96	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
97	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
98	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
99	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
100	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
101	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
102	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
103	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
104	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
105	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
106	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
107	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
108	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
109	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
110	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
111	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
112	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
113	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
114	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
115	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
116	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
117	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
118	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
119	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
120	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
121	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
122	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
123	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
124	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
125	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
126	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
127	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
128	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
129	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
130	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
131	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
132	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
133	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
134	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
135	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
136	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
137	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
138	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
139	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
140	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
141	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
142	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-	欠陥	画面地に黒斑	
143	万能計	黒	直径(2.5)、内径(2.0)、厚さ(0.3)		-</td			

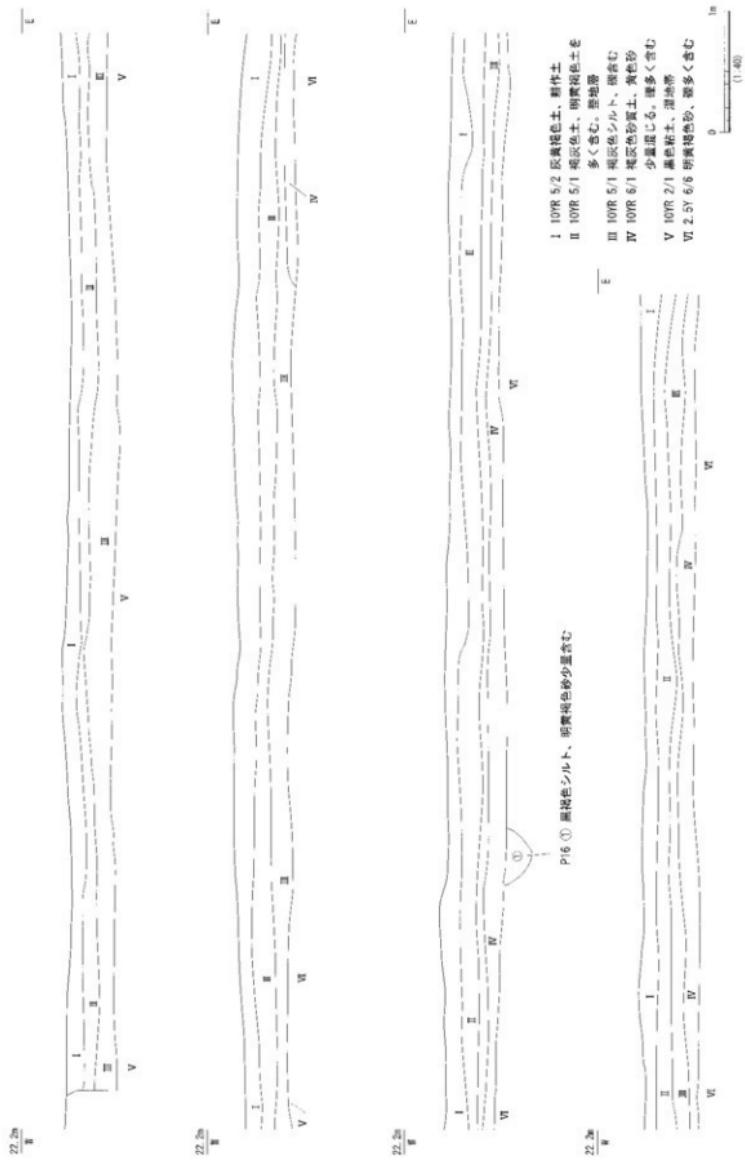


第9図 遺跡全体図(1:300)

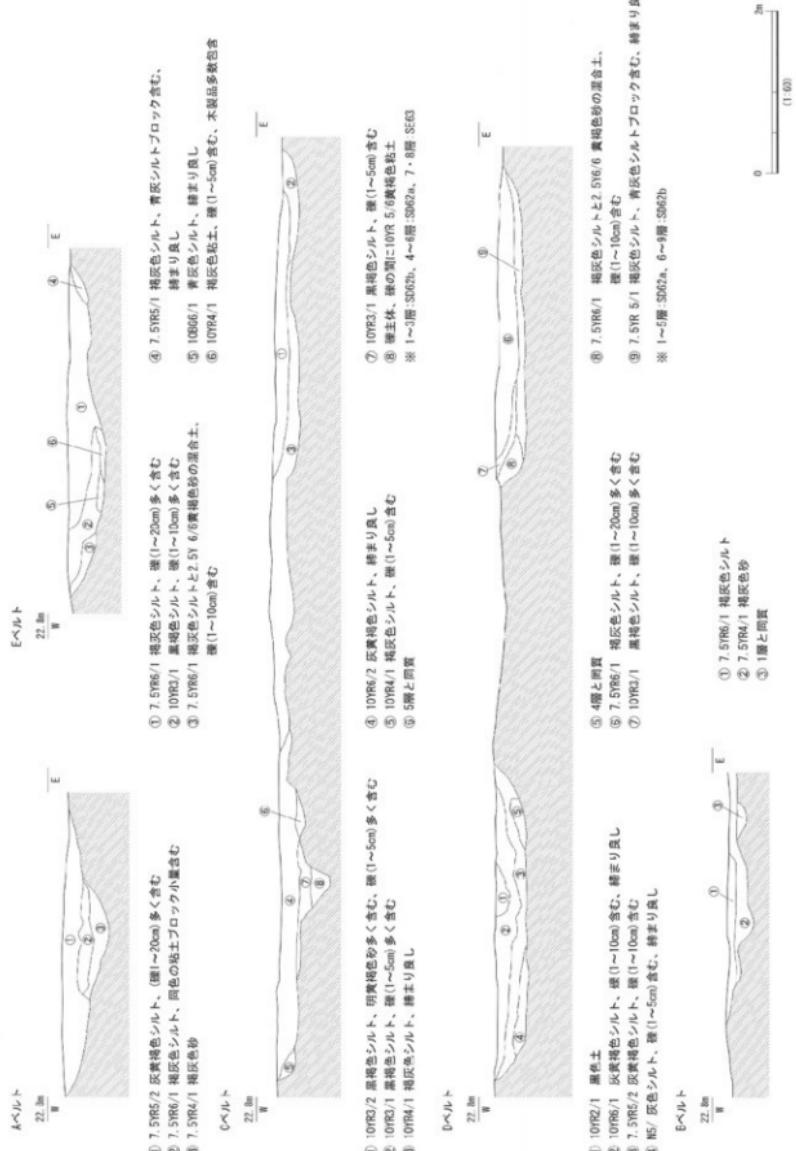




第11図 東側造構図 (1:200)

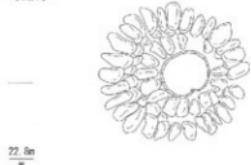


第12图 调查区北壁断面图 (1:40)



第13図 S062断面図 (1:60)

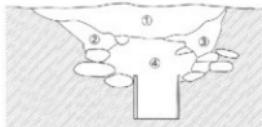
<SE1>

22.8m
E

<SE2>

22.8m
E

(遺物出土状況図)

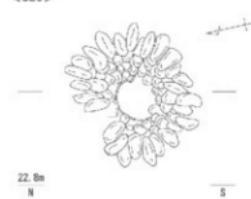


- ① 10YR3/1 黒褐色シルト、礫(1~10cm)多く含む
 ② 10YR3/1 黒褐色シルトと2.5Y6/6 明黄褐色砂の混合土
 ③ 2層と同質
 ④ 10YR 6/2 反対褐色粘土、礫(1~20cm)多く含む

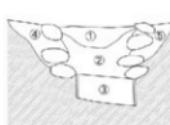


- ① 10YR3/1 黒褐色シルト(1~10cm)含む
 ② 10YR3/1 黒褐色シルトと2.5Y6/6 明黄褐色砂の混合土、礫(1~3cm)多く含む

<SE6>

22.8m
N

S

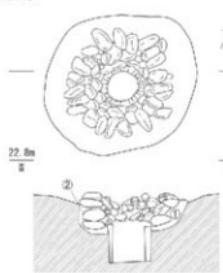
22.8m
E

- ① 10YR3/1 黒褐色シルト、
 矽(1~10cm)含む
 ② 10YR3/1 黒褐色粘土
 矽(1~10cm)多く含む
 ③ N5/
 黒色シルト、
 矽(1~3cm)多く含む
 ④ 7.5YR6/1
 反対褐色シルト、
 矽(1~3cm)多く含む
 ⑤ 4層と同質



- ① 7.5YR6/1 反対褐色シルトと2.5Y6/6 明黄褐色砂の混合土
 矽(1~3cm)多く含む
 ② 1層と同質
 ③ 矽(1~10cm)主体、隙間にN5/灰色砂入る

<SE15>

22.8m
E

S

- ① 10YR3/1 黒褐色シルトと
 2.5Y6/6 明黄褐色砂の
 混合土、礫(1~3cm)多く含む
 ② 1層と同質

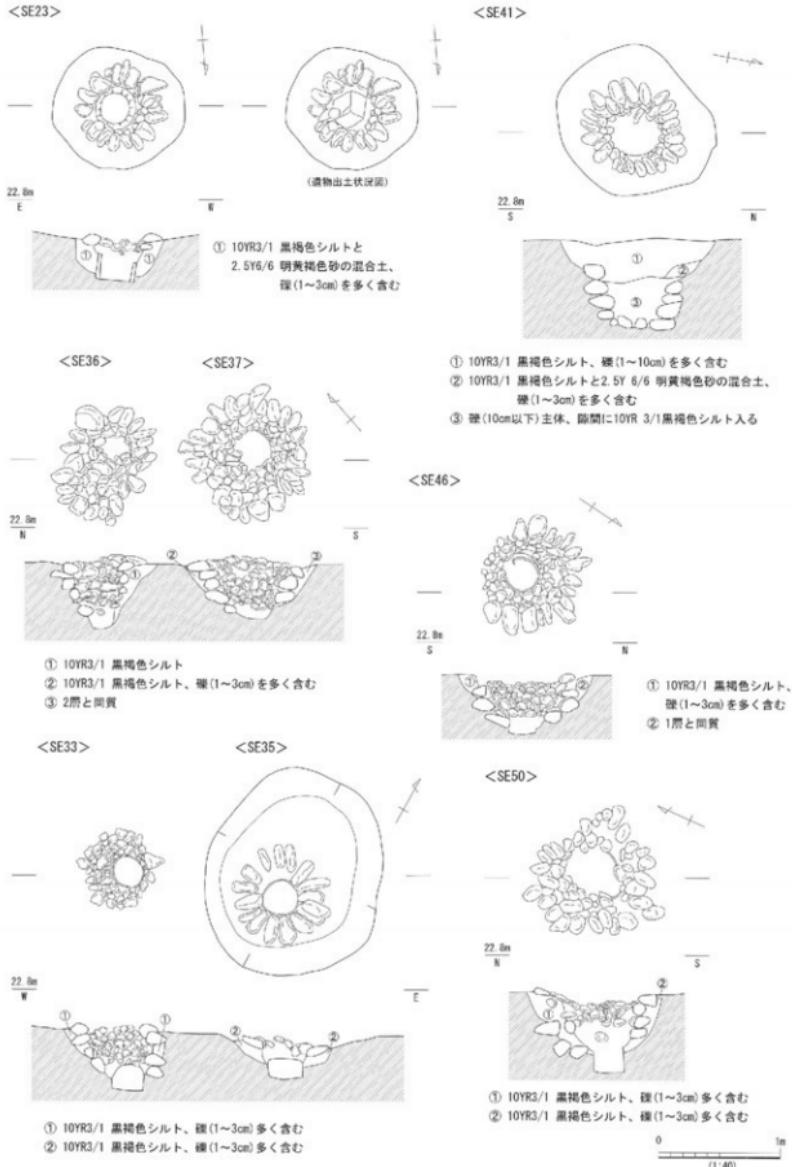
22.8m
N

S

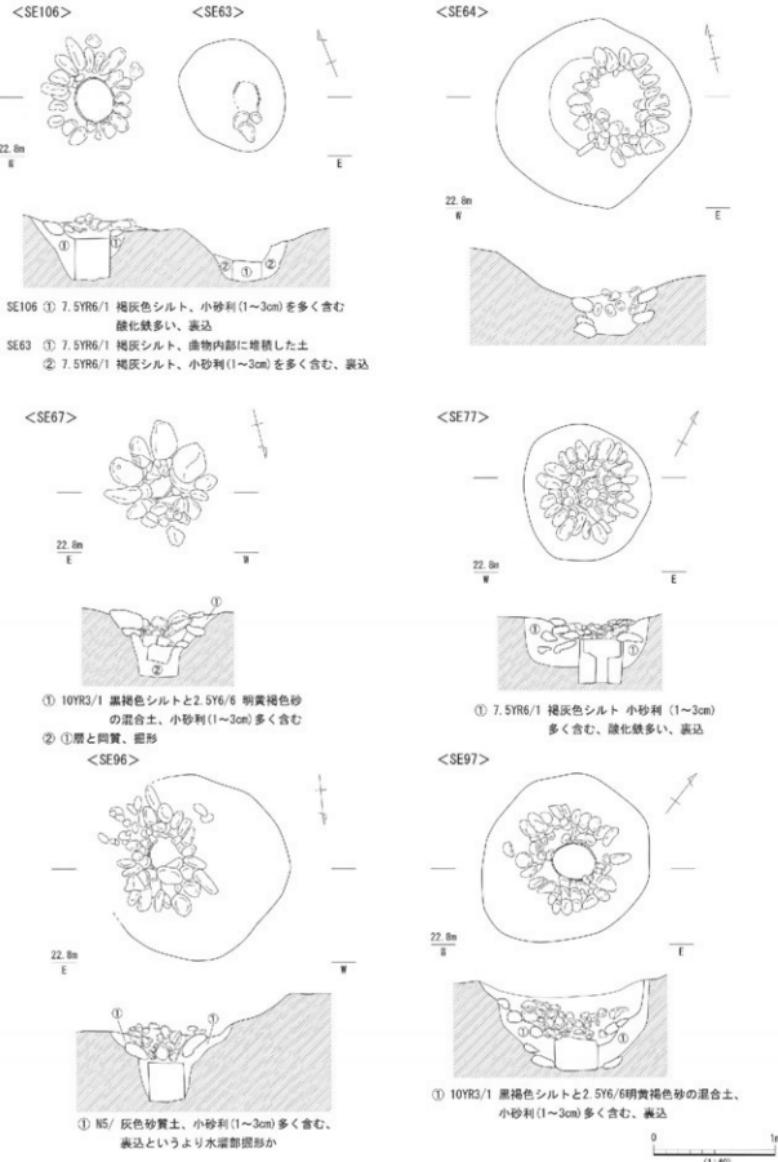
- ① 10YR3/1 黒褐色シルト、礫(1~3cm)多く含む
 ② 1層と同質

0 1m
(1:40)

第14図 遺構実測図 (1:40)

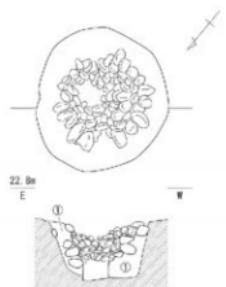


第15図 遺構実測図 (1:40)

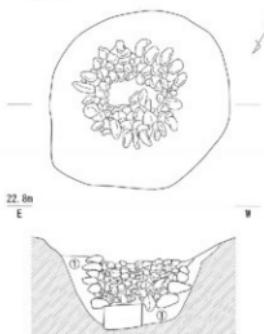


第16図 遺構実測図 (1:40)

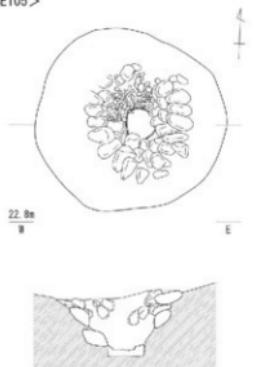
<SE98>



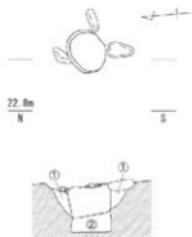
<SE99>



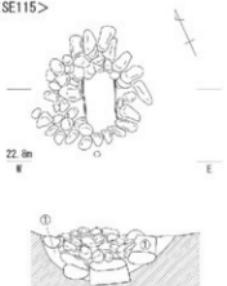
<SE105>



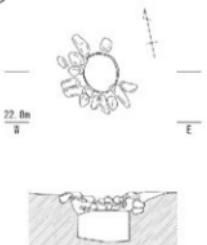
<SE114>



<SE115>



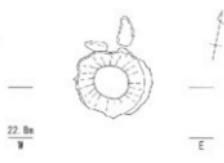
<SE116>



0 1m
(1:40)

第17図 遺構実測図 (1:40)

<SE125>



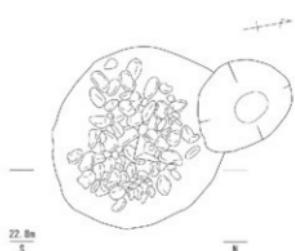
① N5/ 灰色シルトと2. SY6/6 明黄褐色砂の混合土、
礫(1~20cm)多く含む、彫形

<SE127>



① 10YR3/1 黒褐色シルト、小砂利(1~3cm)多く含む、彫込

<SE128>

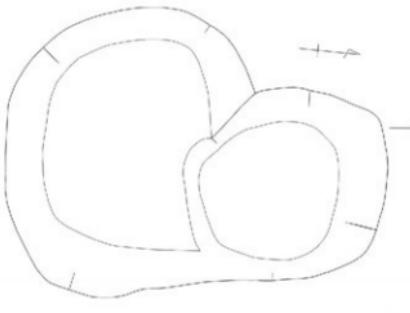


① 10YR3/1 黑褐色シルトと2. SY6/6 明黄褐色砂の混合土、
小砂利(1~5cm)多く含む、彫込

<SE129>



<SX130>



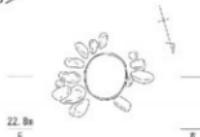
① 10YR5/1 棕灰色シルト、礫(1~5cm)含む

② 10B55/1 青灰色シルト、礫(1~5cm)含む

③ 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト、礫(1~3cm)含む

④ 10YR3/1 黒褐色シルト、礫(1~5cm)含む

<SE133>

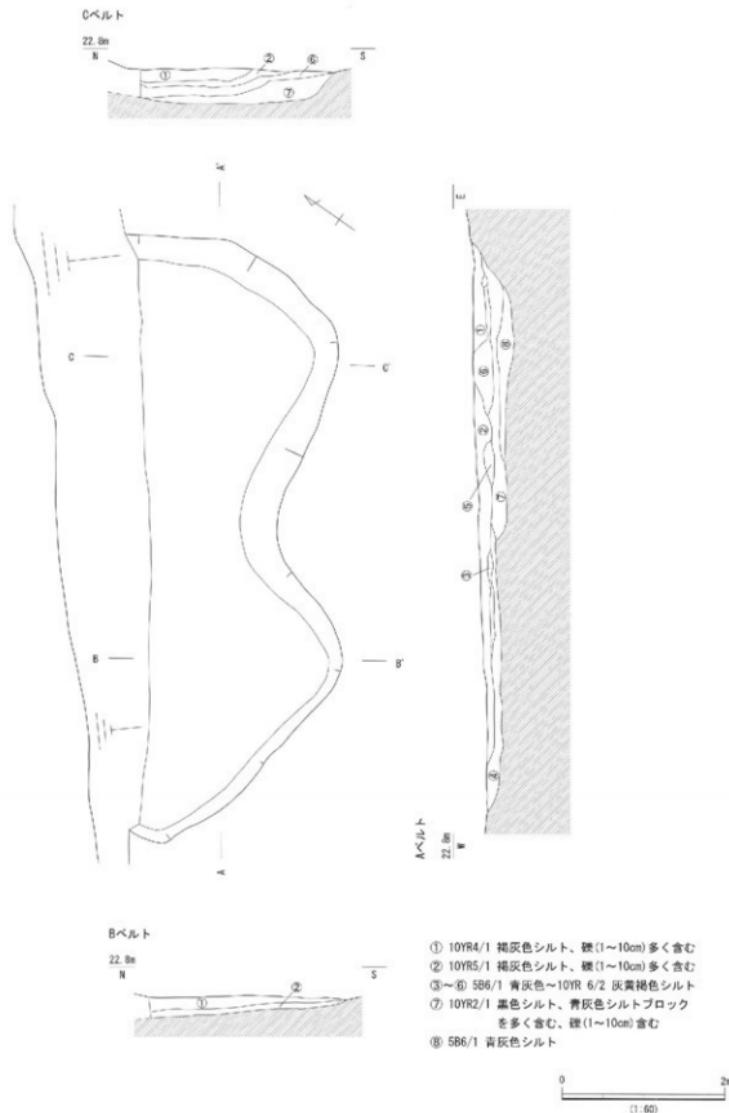


① 10YR3/1 黑褐色シルト、彫込

0 1m
(1:40)

第18図 造構実測図 (1:40)

<SX122>



第19図 遺構実測図 (1:60)

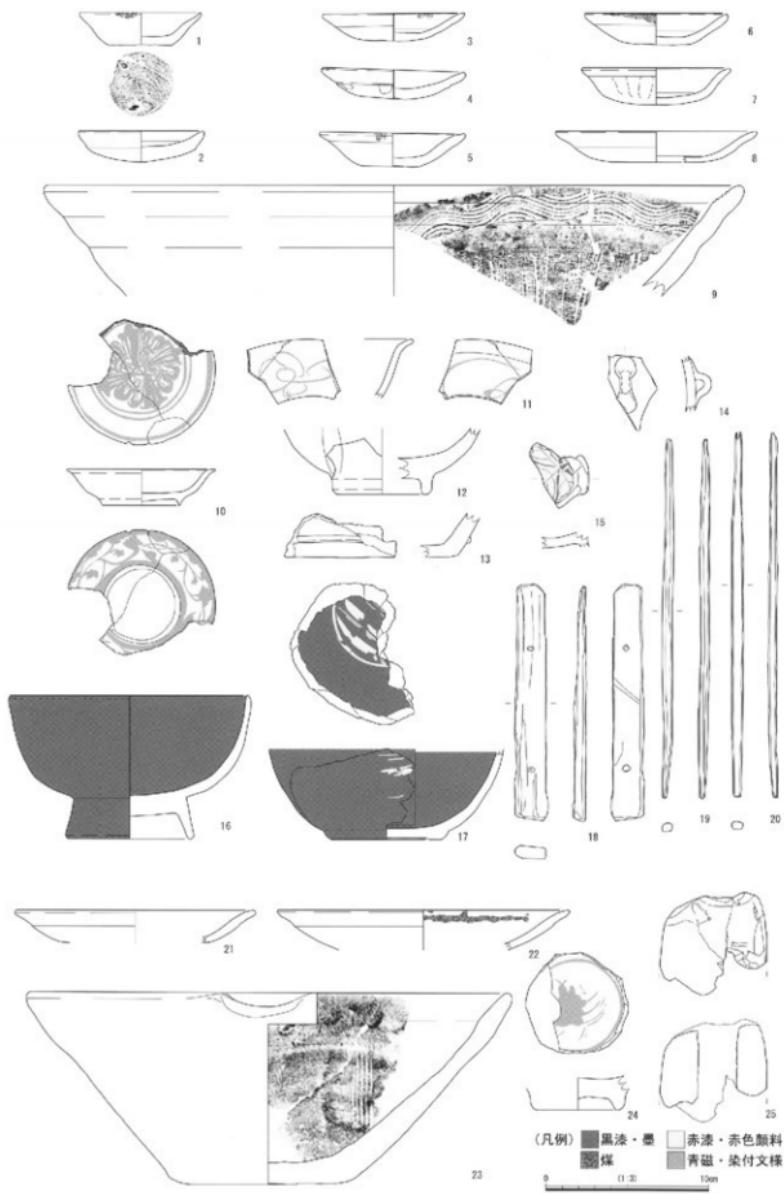


図20 出土遺物 実測図 1 (1~20: SD62a, 21~25: SD62b)

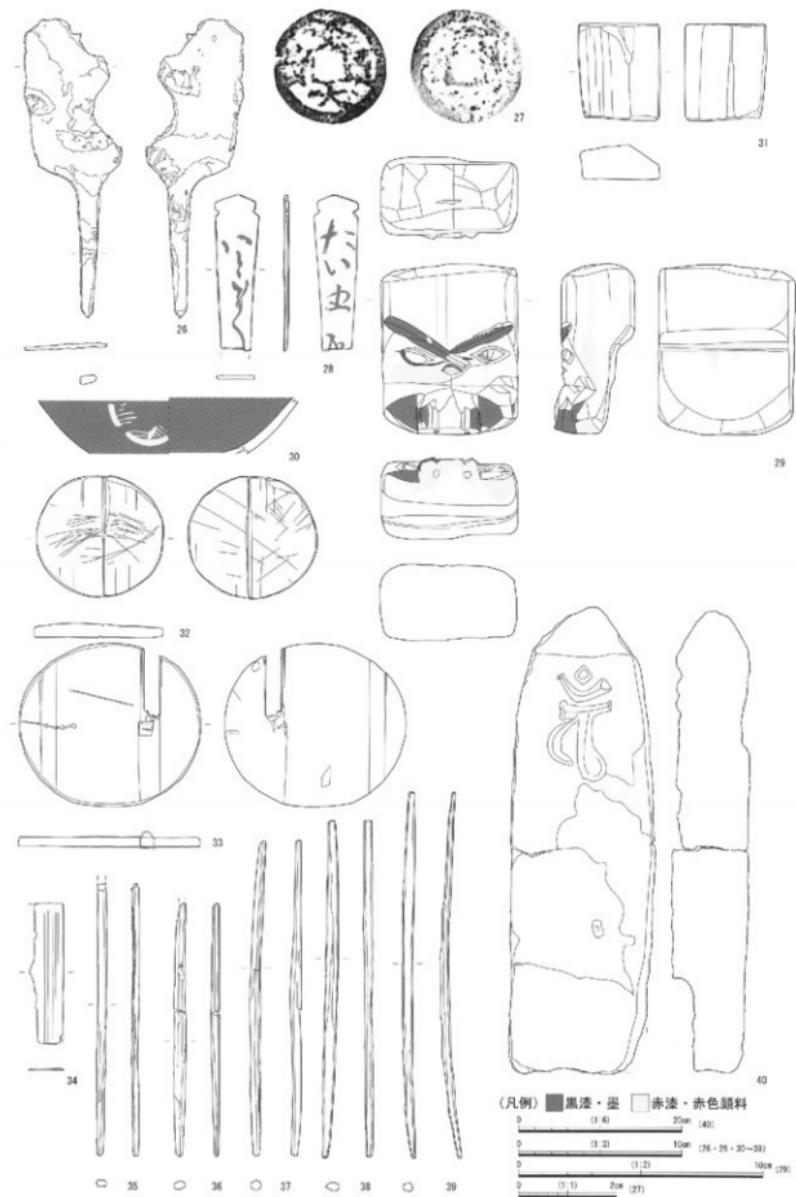


図21 出土遺物 実測図2 (26~40:SD62b)

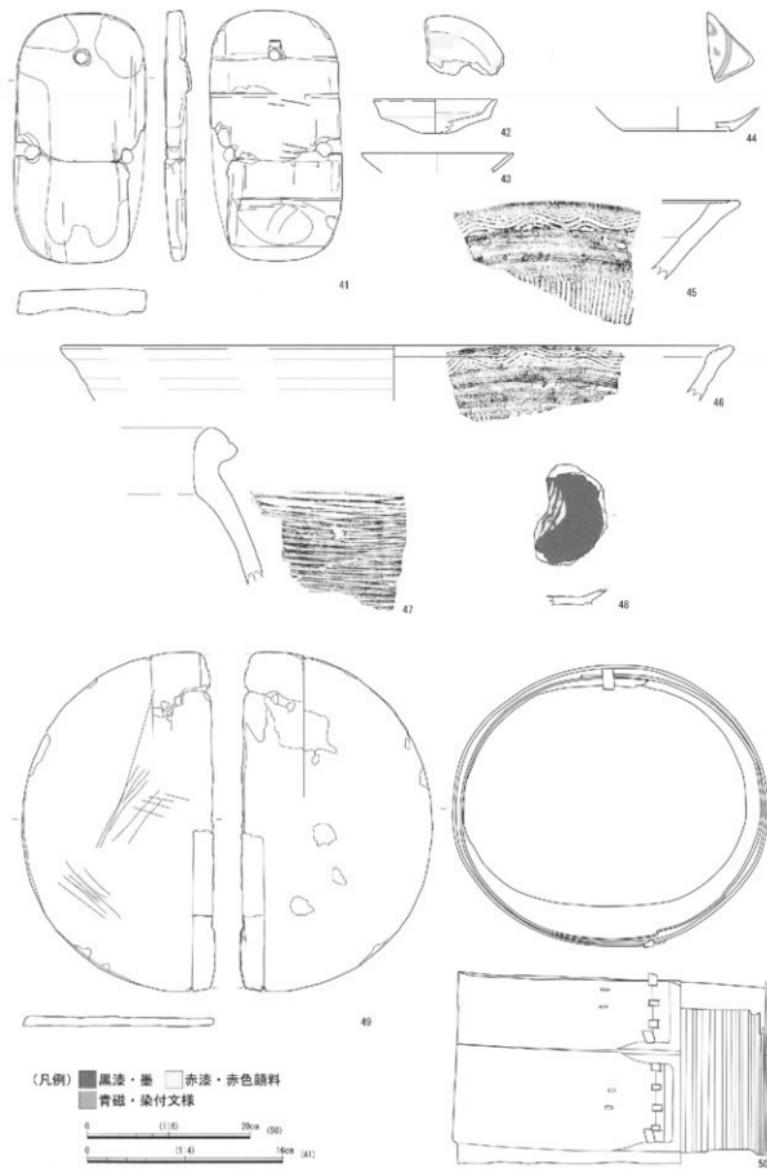
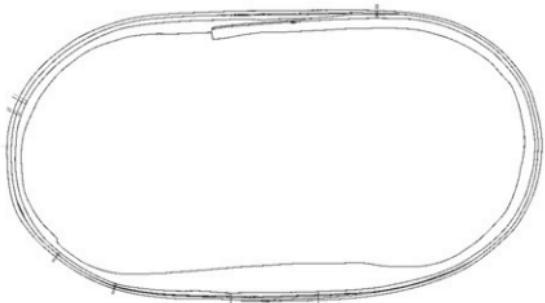
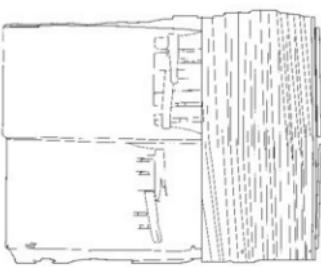
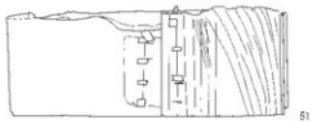
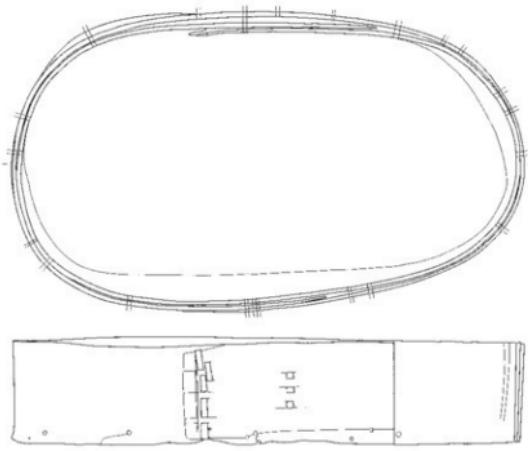


图22 出土遗物 宽测图3 (41:SD62b, 42:SE7, 43~44:SE1, 45~48:SE99, 46:SE128, 47:SE2, 49:SE116, 50:SE114)

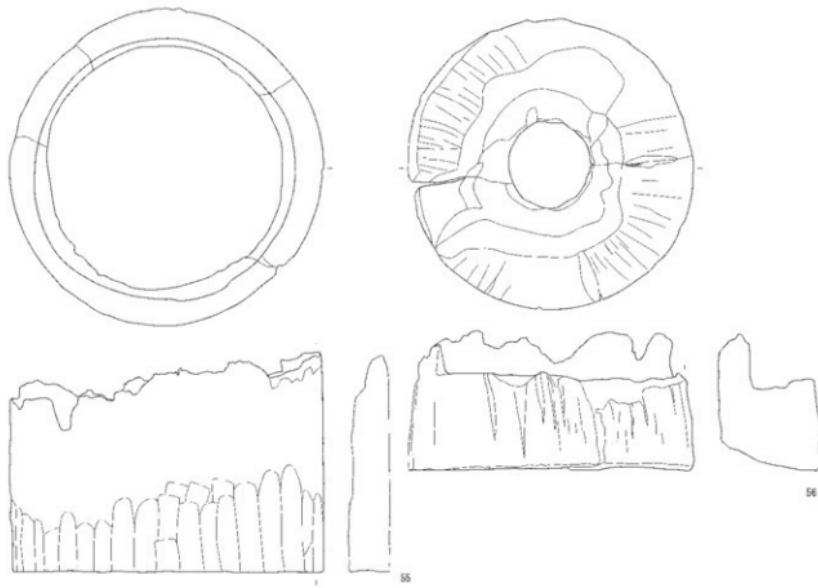


— (1:4) — 25cm (51~53)

図23 出土遺物 実測図 4 (51:SE106, 52:SE96, 53:SE129)



54



55

56

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
25cm (54~56)

図24 出土遺物 実測図5 (54:SE115, 55:SE15, 56:SE17)

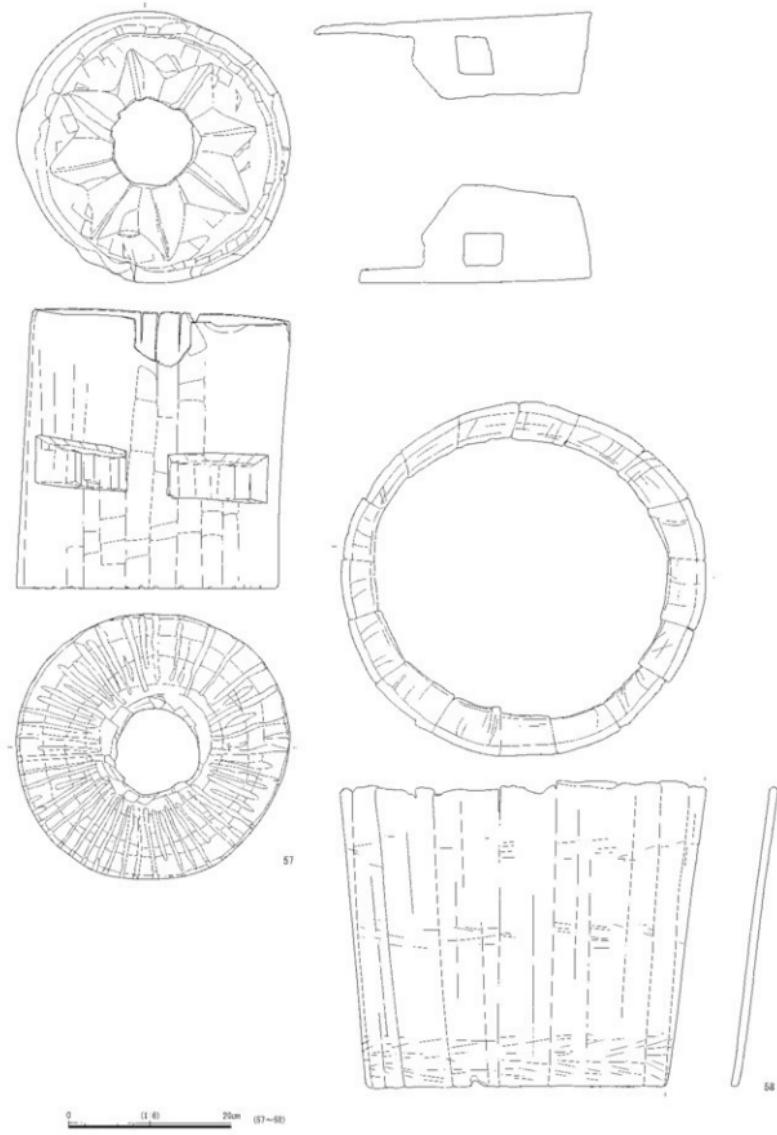


図25 出土遺物 実測図 6 (57:SE77, 58:SE1)

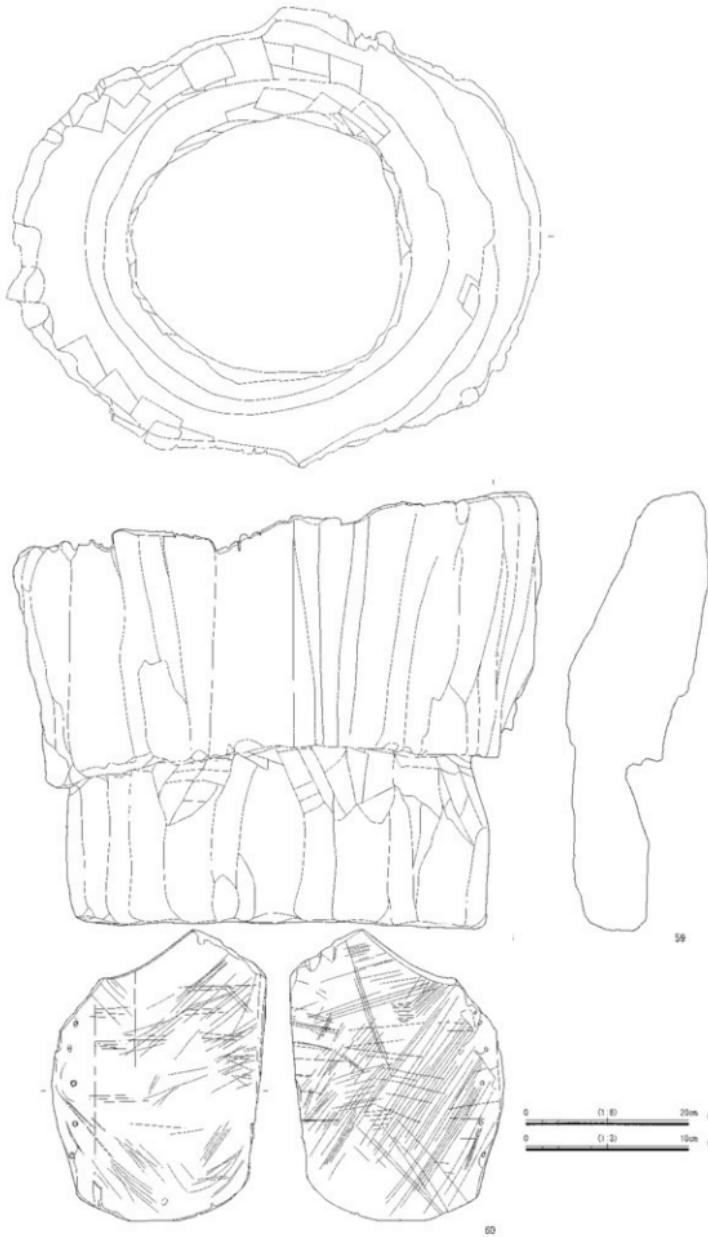


図26 出土遺物 実測図 7 (59:SE125, 60:SE67)

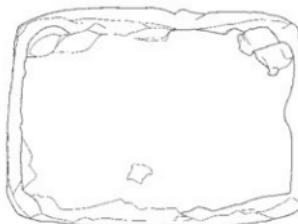
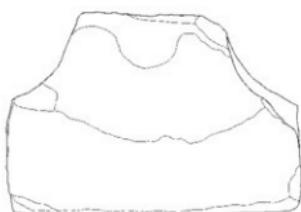
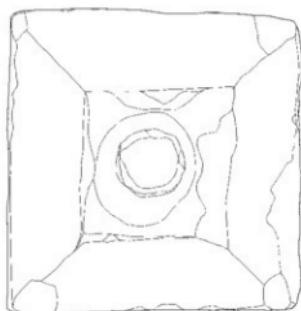
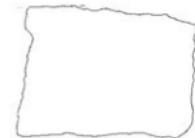
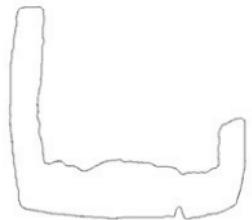
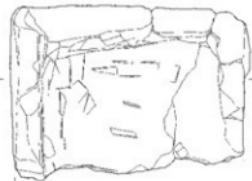


図27 出土遺物 実測図 8 (61:SE2, 62:SE7, 63:SE128, 64:SE23)

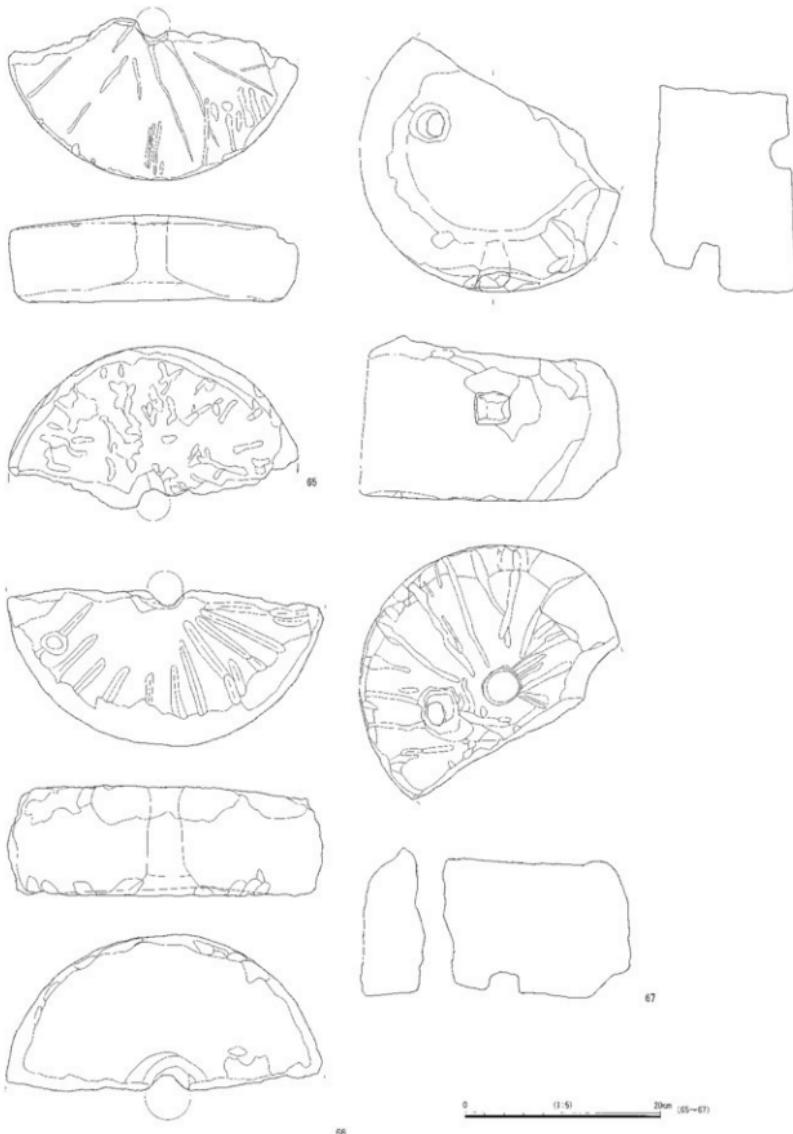
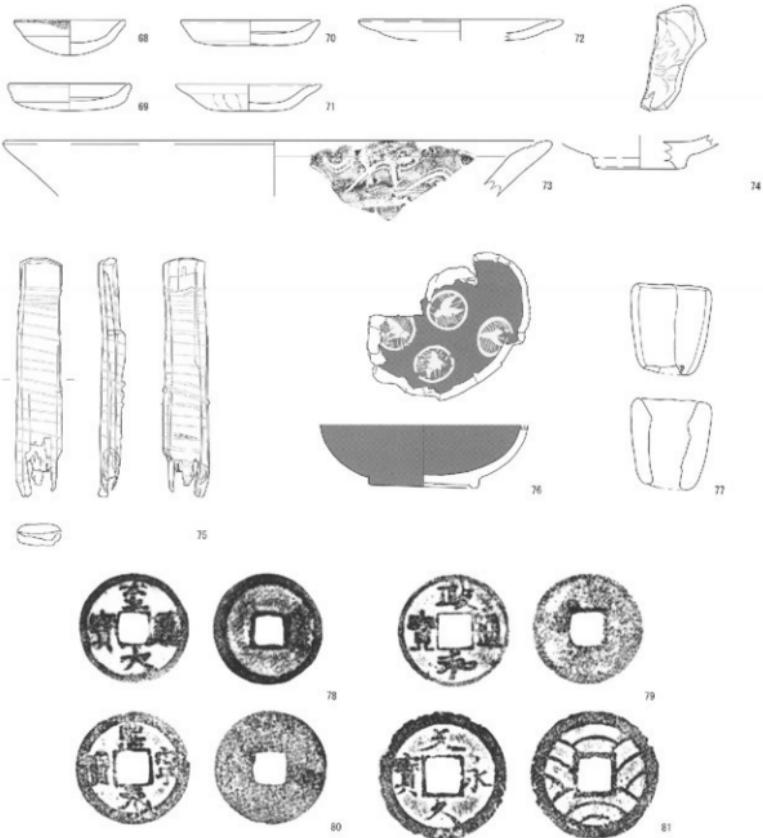


図28 出土遺物 実測図 9 (65:SE36, 66・67:SE67)



(凡例) ■ 黒漆
■ 赤色顔料
■ 煤
■ 青磁・染付文様

0 0.10 10cm (68~74・76~77)
0 0.20 10cm (75)
0 0.10 5cm (78~81)

図29 出土遺物 実測図10(68・69:SK68, 70:SK97, 71~76:SK122, 78:P65, 77・79~81:包含層)



調査区全景（真上から）



調査区全景（東から）

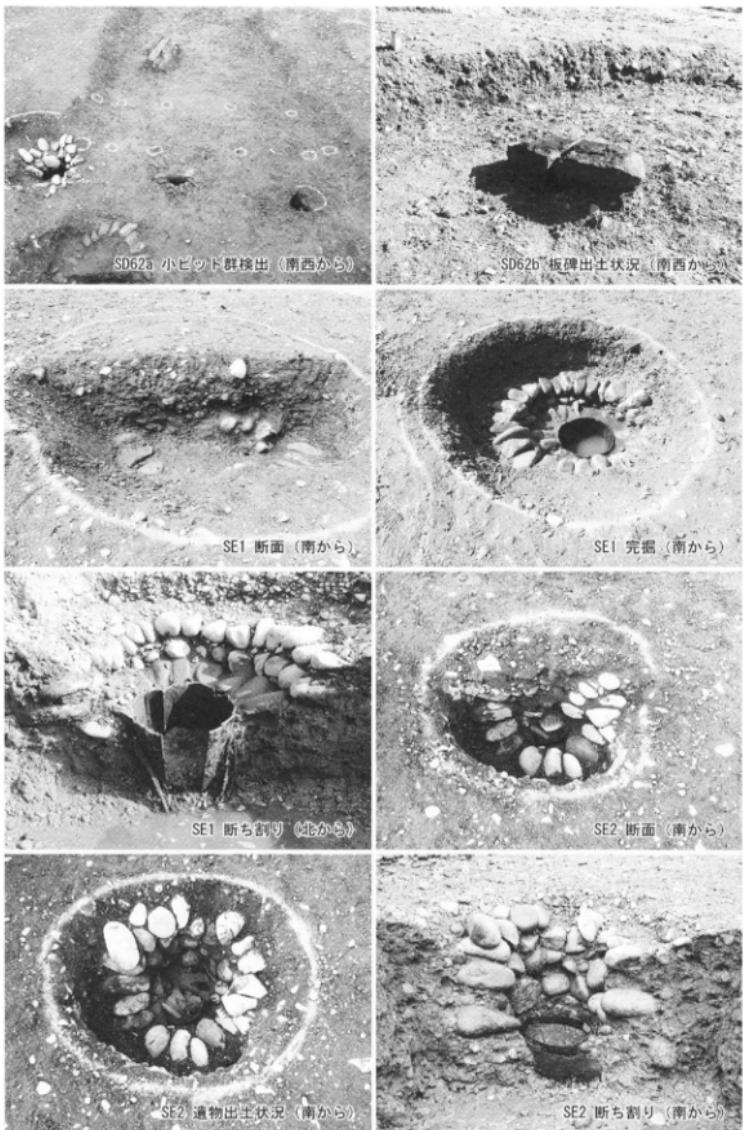


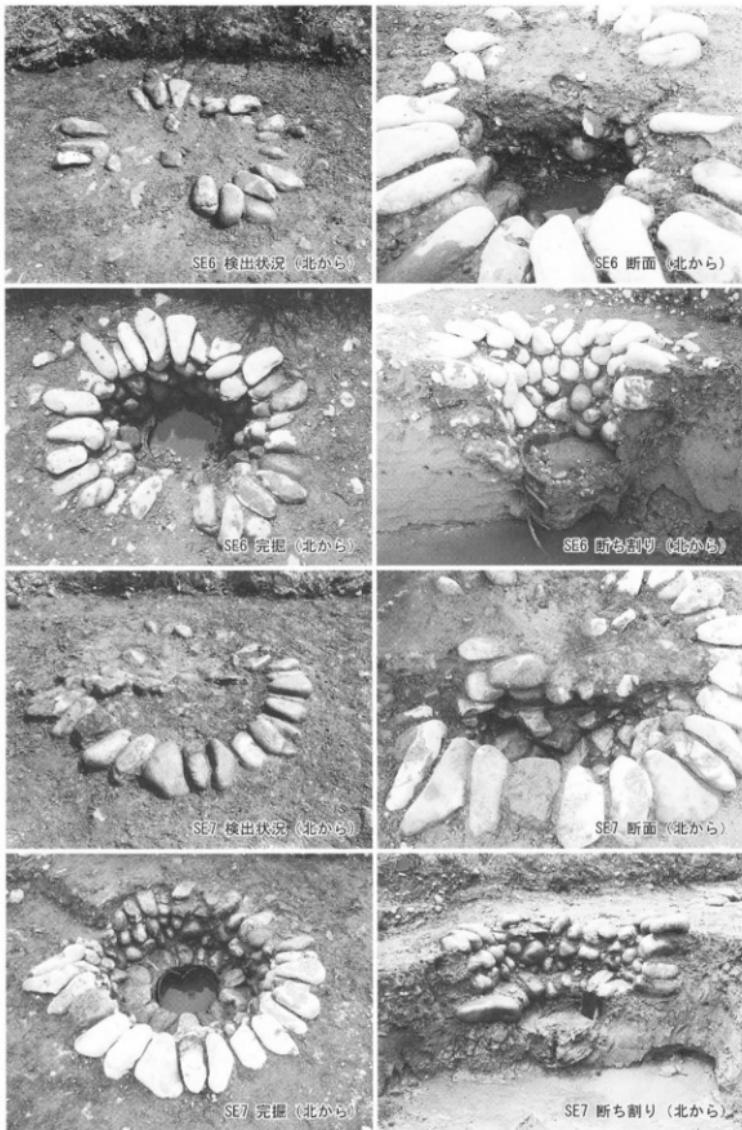
SD62a・b Cベルト西側（南西から）



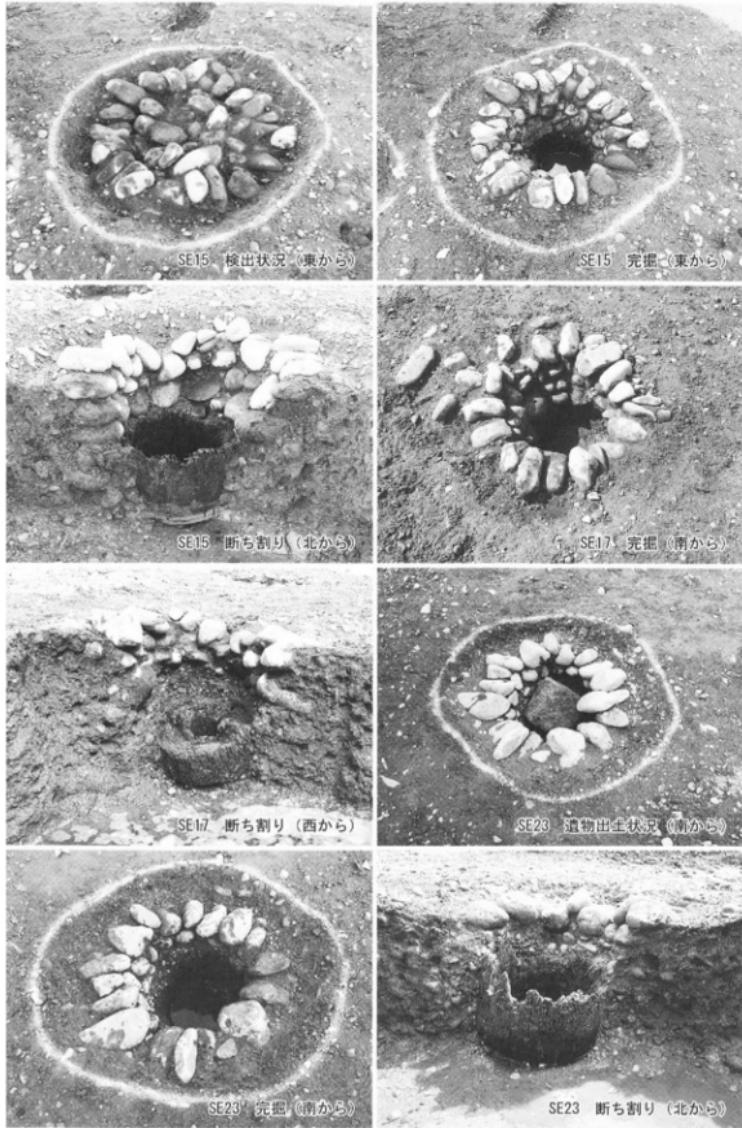
SD62a・b Cベルト東側（南西から）

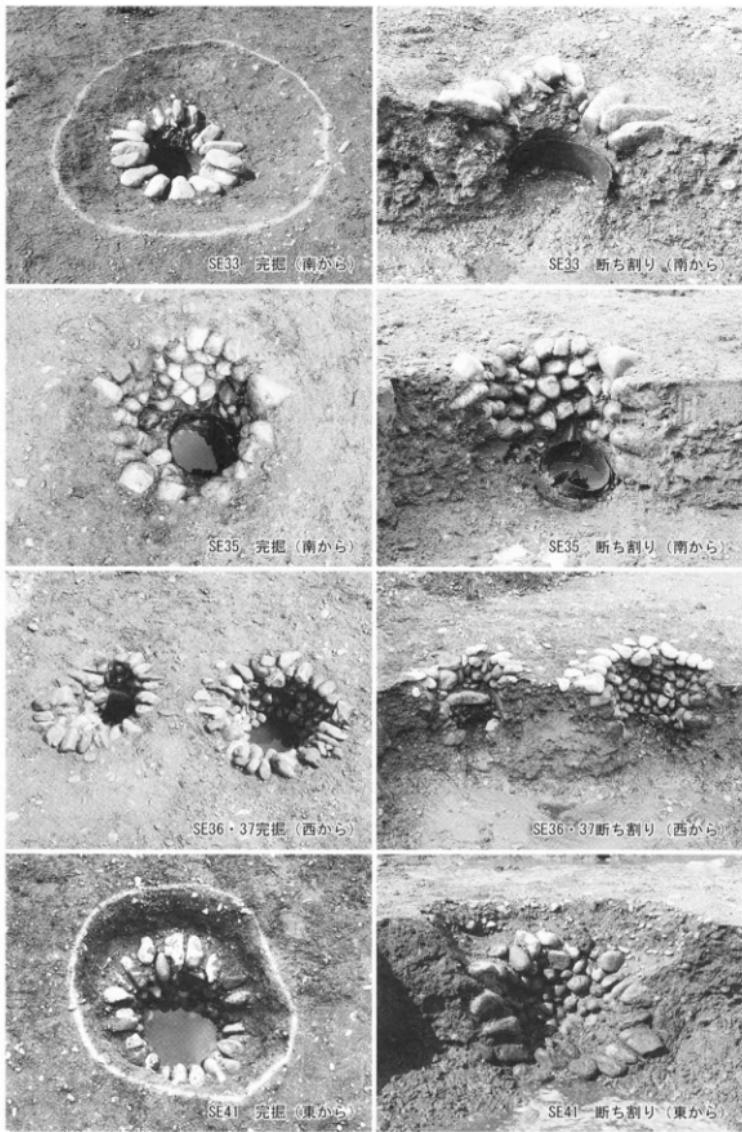
図版 3



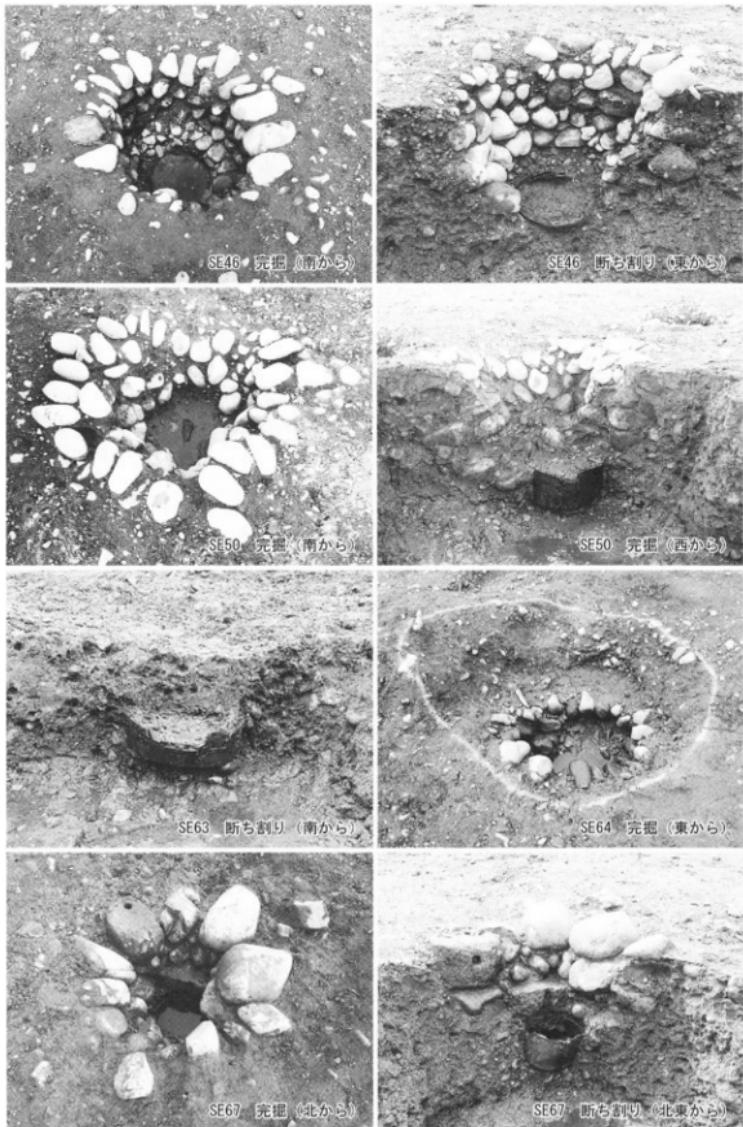


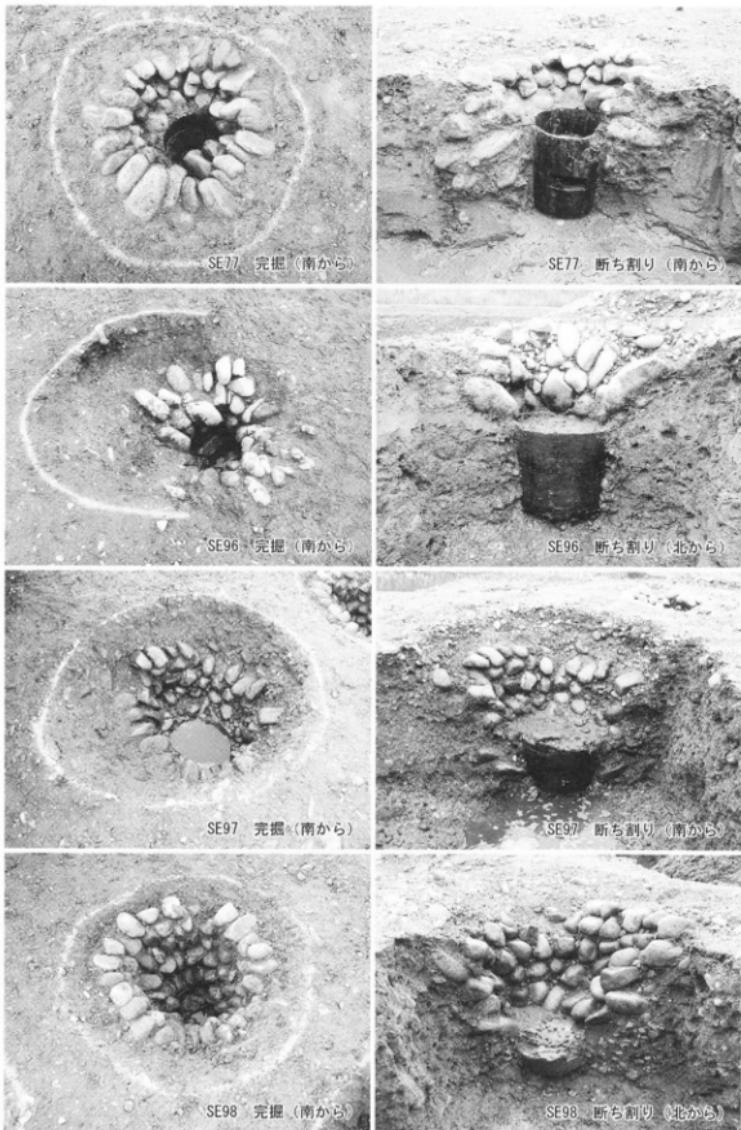
図版 5



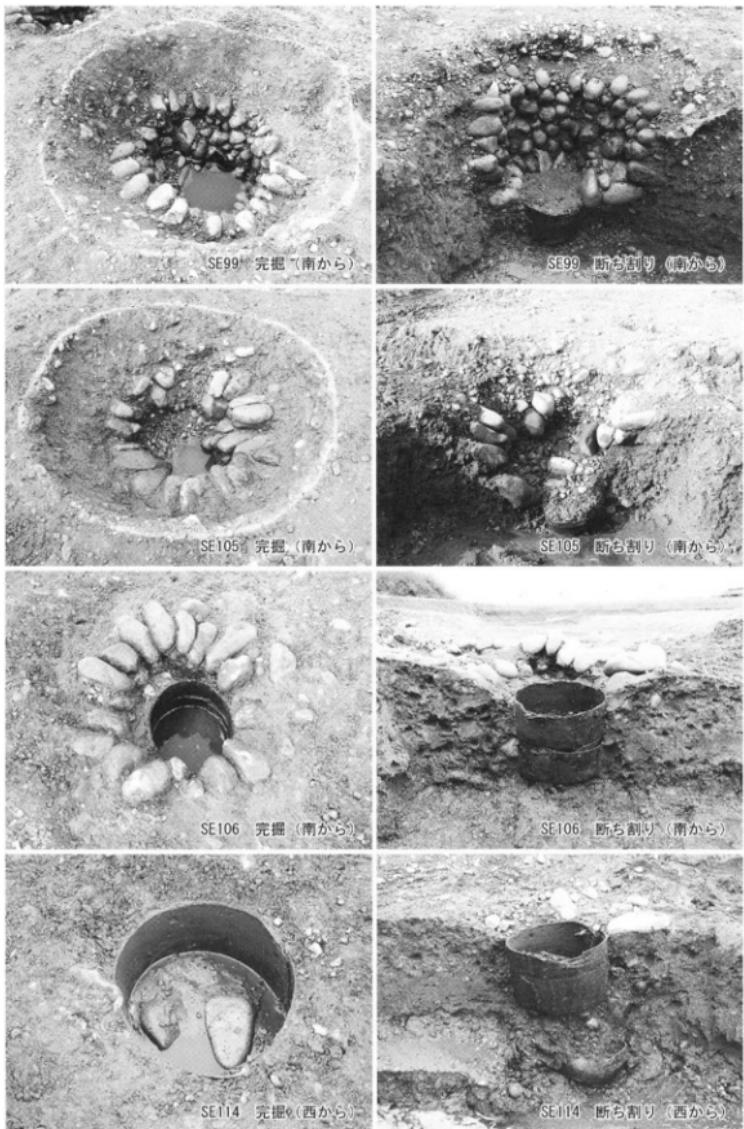


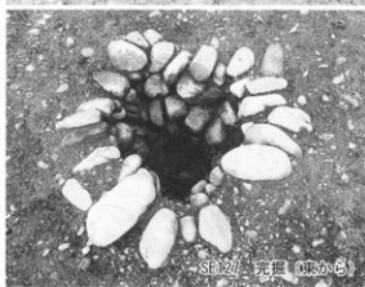
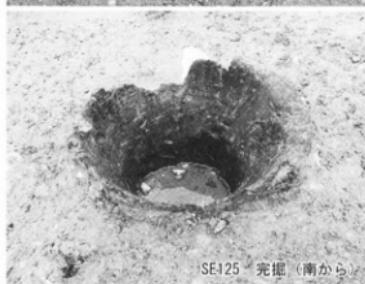
図版7



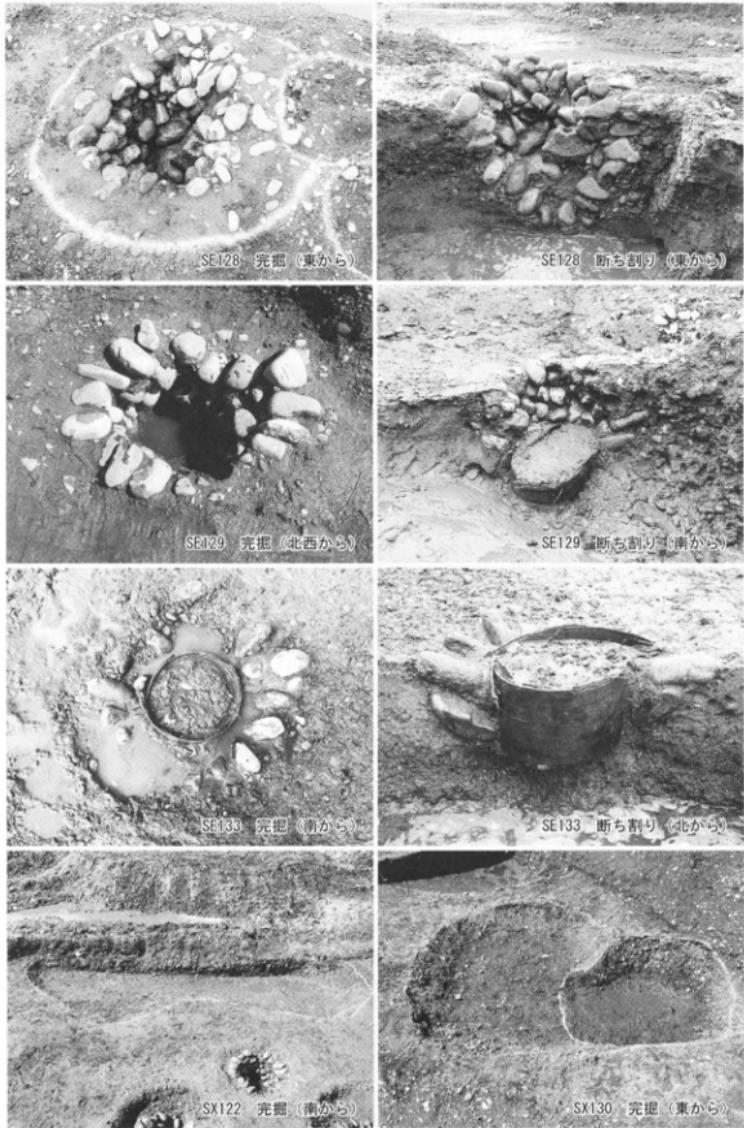


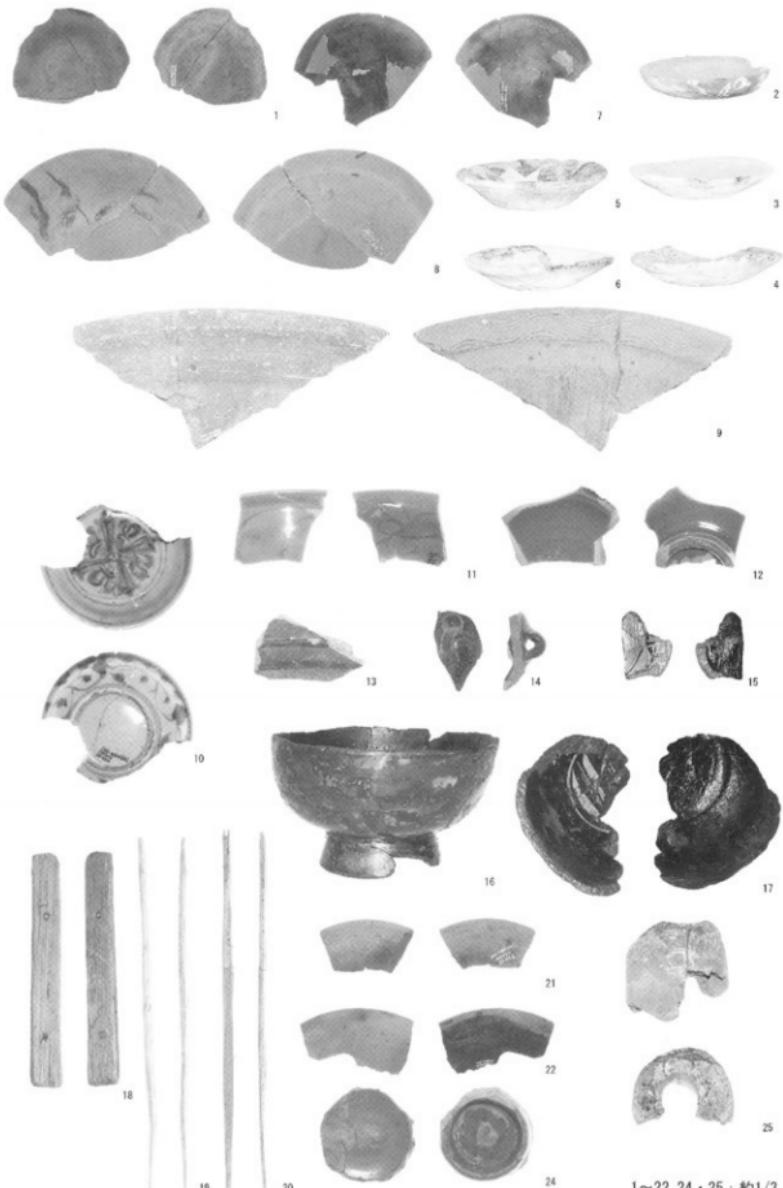
図版9





図版11



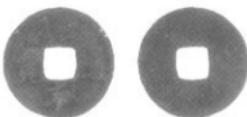


出土遺物(1~20 : SD62a, 21・22・24・25 : SD62b)

1~22, 24・25 : 約1/3



26



27



28



30



31



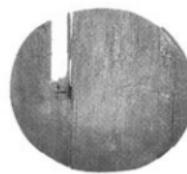
29



29



32



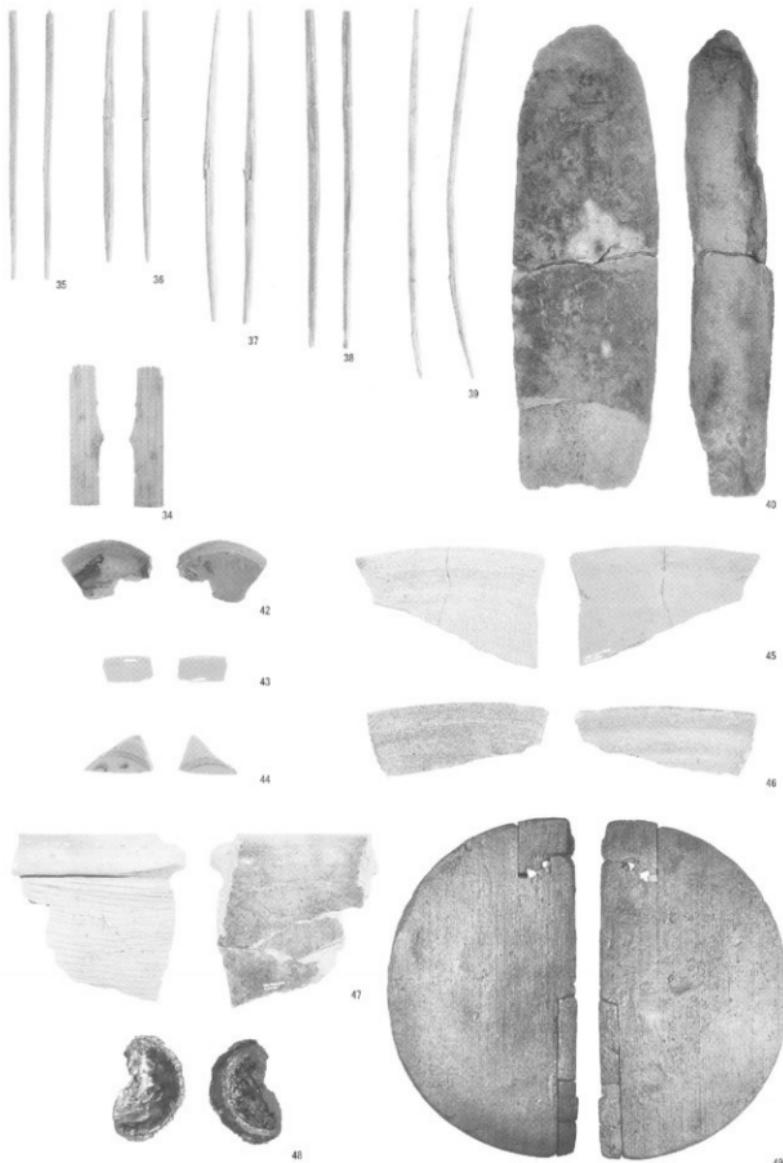
33



41

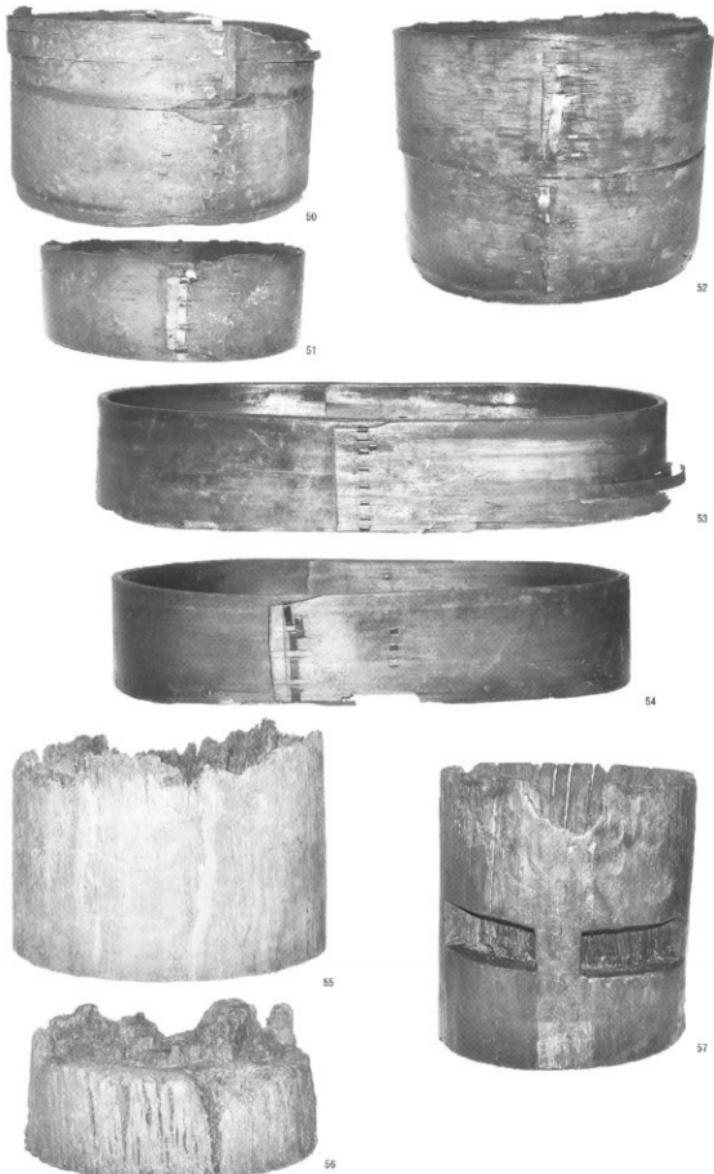
23・26・28・30～33：約1/3, 27：約1/1, 29：約1/2, 41：約1/4

出土遺物(23・26～33・41：SD62b)



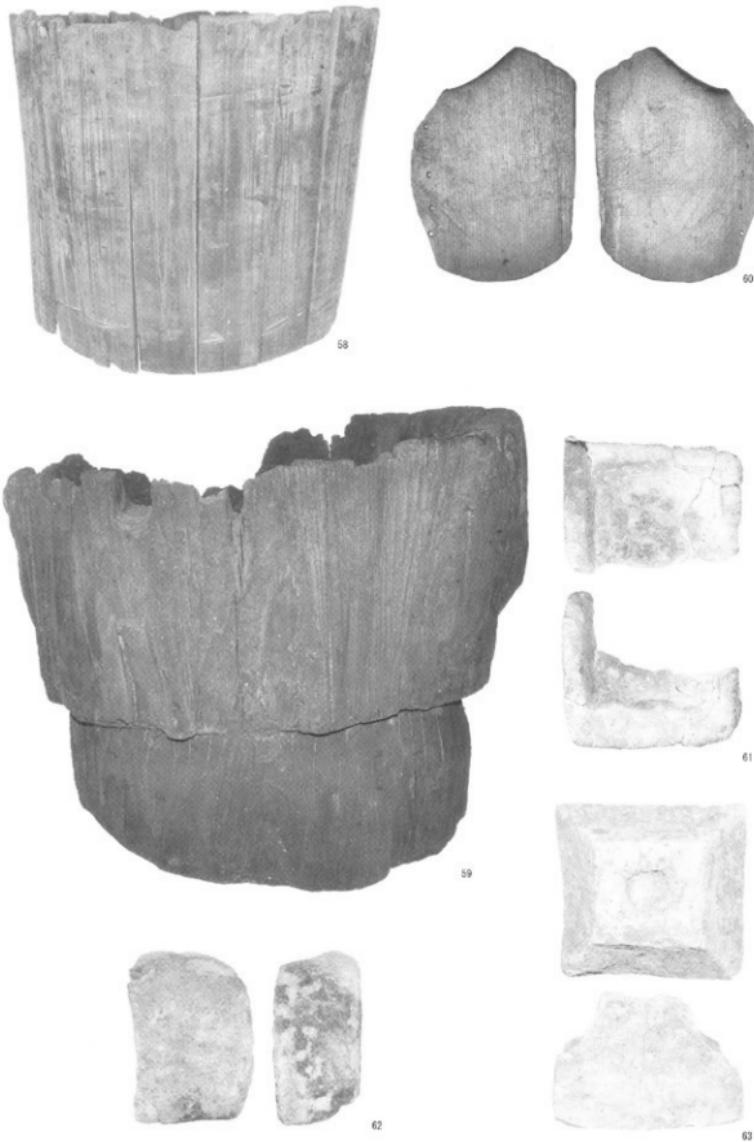
出土遺物 (34~40 : SD62b, 42 : SE7, 43~44 : SE1, 45 : SE99,
46 : SE128, 47 : SE2, 48 : SE99, 49 : SE116)

34~39・42~49 : 約1/3, 40 : 約1/6



出土遺物 (50 : SE114, 51 : SE106, 52 : SE96, 53 : SE129,
54 : SE115, 55 : SE15, 56 : SE17, 57 : SE77)

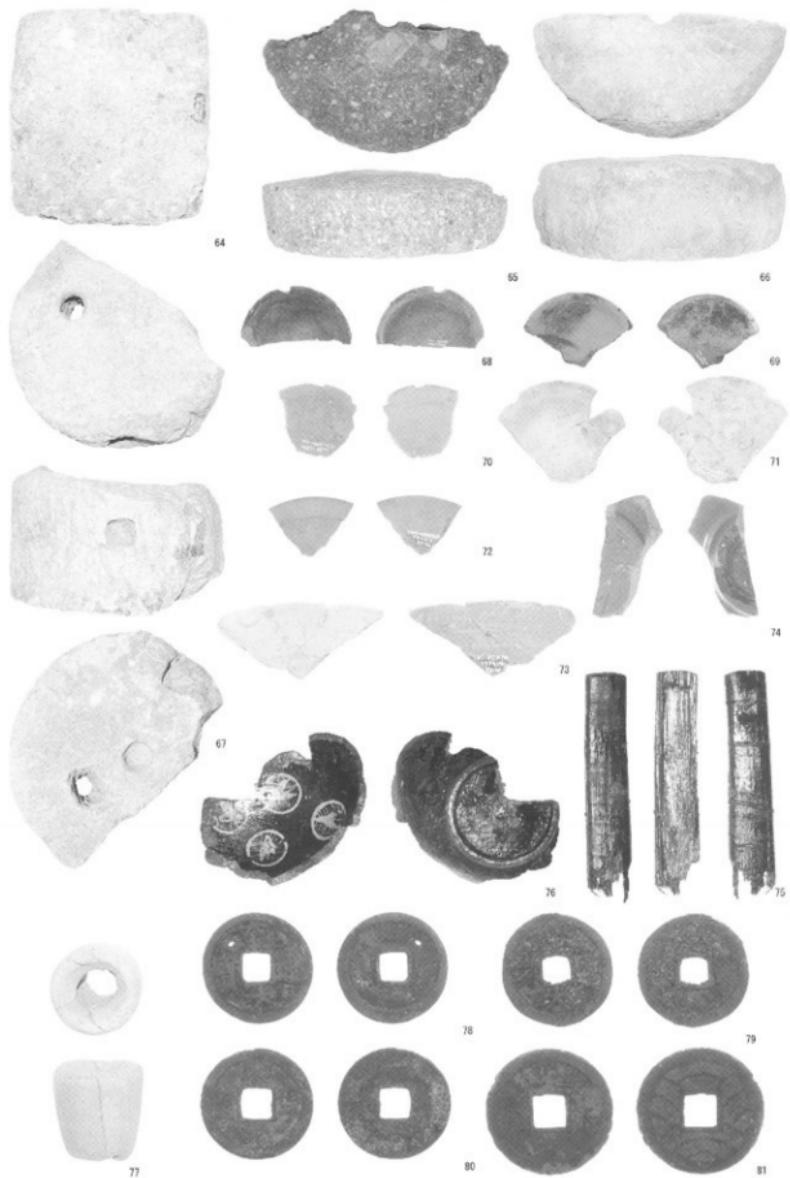
50~57 : 約1/6



出土遺物 (58 : SE1, 59 : SE125, 60 : SE67, 61 : SE2, 62 : SE7, 63 : SE128)

58・59・62・63 : 約1/6, 60・61:1/4

図版17



64~67 : 約1/6, 68~77 : 約1/4, 78~81 : 約1/1

出土遺物 (64 : SE23, 65 : SE36, 66・67 : SE67, 68・69 : SK68, 70 : SK97,
 (71~76 : SX122, 78 : P65, 77・79 ~81 : 包含層)

報告書抄録

ふりなが いしなだきふねいせきはつくつちょうさほうこくしょ								
書名 石名田木舟遺跡発掘調査報告書								
副書名 ほ場整備（経営体育成基盤整備事業）地崎地区に伴う埋蔵文化財調査(2)								
シリーズ名 小矢部市埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号 第69冊								
編著者名 中井貞夕 石橋夏樹 伊藤雅和								
編集機関 小矢部市教育委員会								
所在地 〒932-8611 富山県小矢部市本町1番1号								
発行年月日 西暦2011年3月3日								
ふりなが 所収遺跡名	ふりなが	コード	北緯	東経	調査期間 (西暦)	調査面積 m ²		
	所在地	山町村 遺跡番号		
いしなだきふねいせき 石名田木舟遺跡	おやべし 小矢部市 じさか 地崎	16209	209169	36° 41' 21"	136° 54' 26"	20100728～ 20100930	1,250	ほ場整備 (経営体育成 基盤整備事業) 地崎地区
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
	散布地	古代		土師器・須恵器				
いしなだきふねいせき 石名田木舟遺跡	集落跡	中世	井戸、溝、 土坑、柱穴、 性格不明遺構	中世土師器・珠洲・ 青磁・青花・瀬戸美濃・瓦質土器・鉢・ 石製品・木製品・繩羽口	石組井戸33基 水溜施設は土に底部を 貫いた状態にした、丸太 削り貫き材・曲物・桶、 木臼、木溜臼の木製品を 使用している。			

小矢部市埋蔵文化財調査報告書第69冊

富山県小矢部市

石名田木舟遺跡発掘調査報告書

－は場整備（経営体育成基盤整備事業）地崎地区に伴う埋蔵文化財調査(2)－

発行日 平成23年3月3日

編集・発行 小矢部市教育委員会

〒932-8611 富山県小矢部市本町1番1号

TEL 0766-67-1760

印 刷 トッププリント

